



Fate  
フェイト/ゼロ

0  
9

TYPE-MOON  
虚淵玄

Kadokawa Con



Fate  
フェイト/ゼロ

役原 真じろう 原作 虚淵玄 /TYPE-MO  
(ニトロプラス)





あそこまで舐められ  
手心てのひらを加えられて  
おきながら  
なぜランサーの槍は  
セイバーに届かない？



なぜ勝てない……？



# Fate

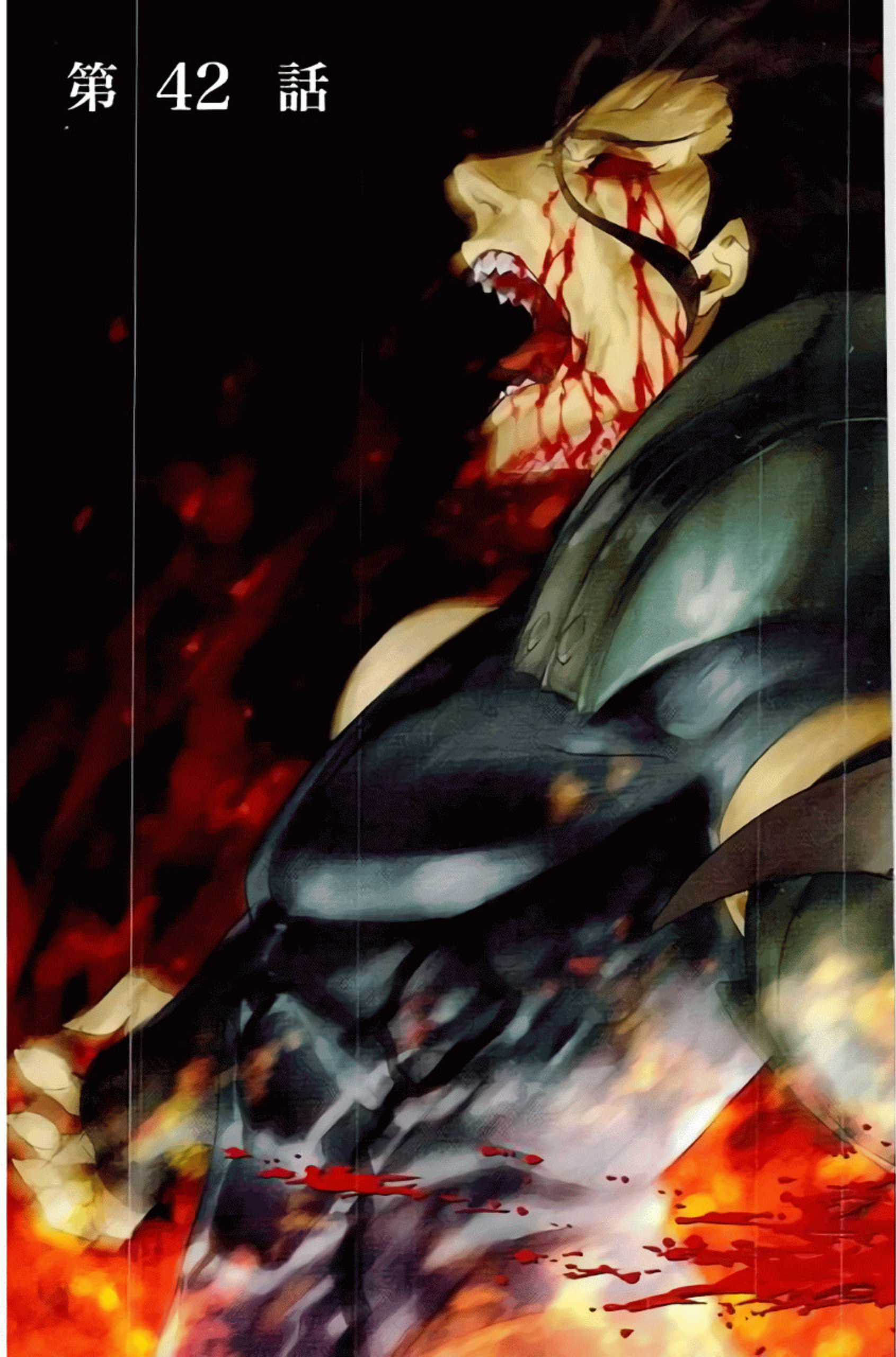
フェイト/ゼロ

漫画 真じろう

原作 虚淵玄 / TYPE-MOON

—(ニトロプラス)

第 42 話



Fate  
フェイト/ゼロ



9

Contents

第 42 話

001

第 43 話

033

第 44 話

065

第 45 話

099

第 46 話

131



こた 答えは明白<sup>めいはいく</sup>——ランサーはセイバーより遙か<sup>はる</sup>に劣るのだ<sup>おと</sup>





当初の予定通りに  
征服王をサーヴァント  
として手中に収めて  
いればきつとこんな  
ことにはならなかった

「必滅の黄薔薇」を  
失った経緯はまだ  
聞き出していないが  
ともかく左手の治癒を  
許した以上「セイバー」に  
対する勝算は  
ますます薄くなった



ならば  
戦いを切り上げ  
マスターを連れて  
逃げるべきなのだ

何故戦闘を  
続けている!?

何より優先すべき  
なのはソラウの  
居場所を探り当て  
救出すること  
だというのに?



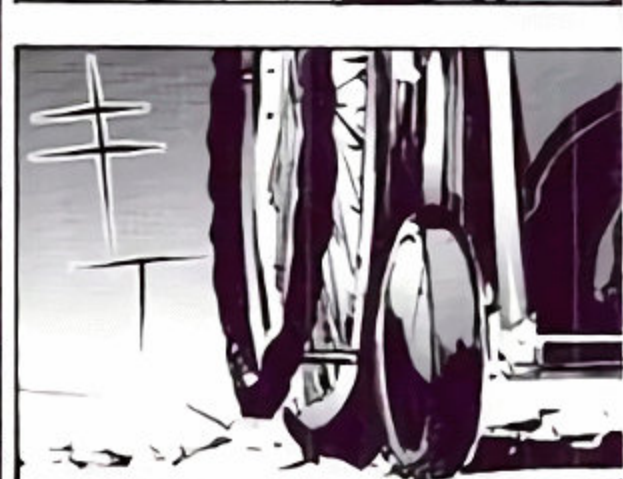
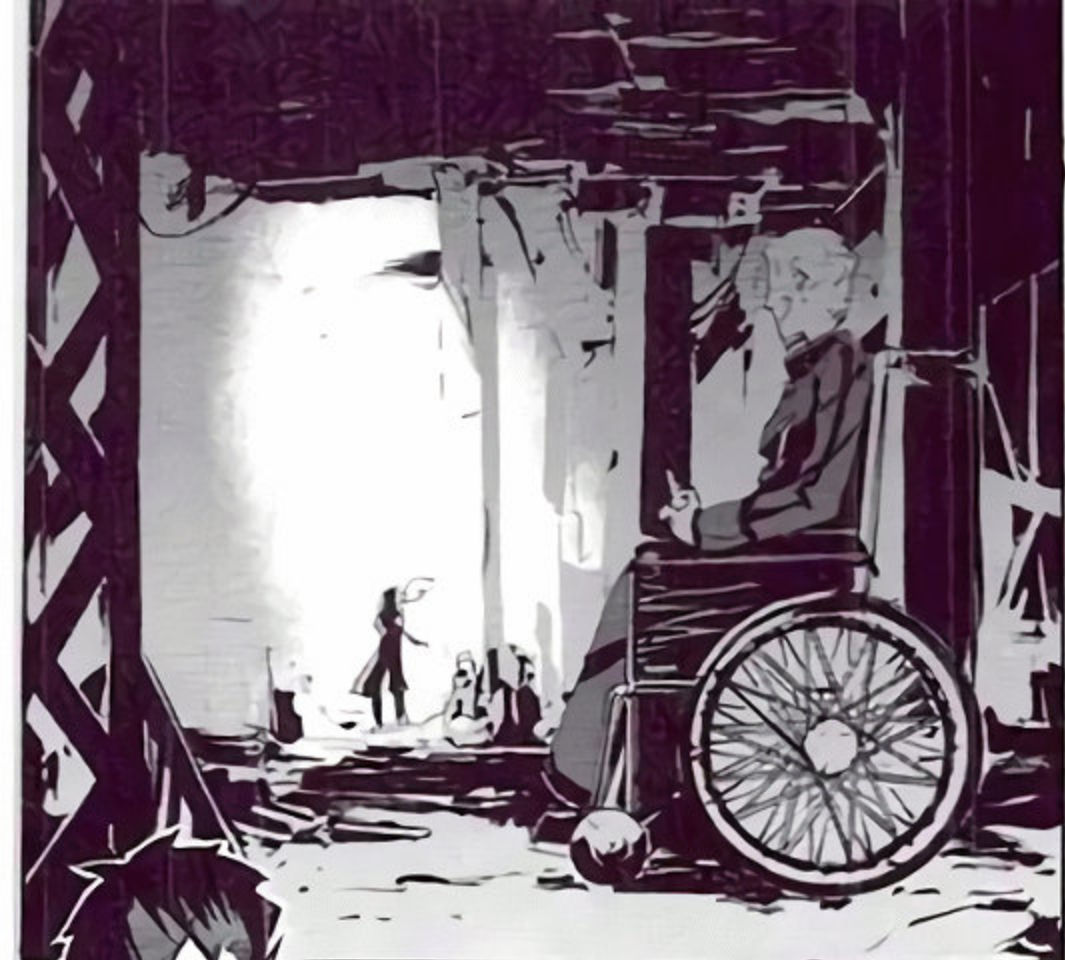
一体どこまで  
あのランサーは  
愚鈍なのだ!?

クソオオオオオ!!

その程度の  
状況判断すら  
ままならない  
のかあッ!?

!!

恋人を死なせたくなければ  
声を立てずに後ろを見る





あの男が  
わざわざ姿を晒し  
ソラウの無事を  
確かめさせたことには  
きつと何らかの  
意味があるはずだ



……ッ!

よりもよっつで……  
奴が……ッ!!

ソラウ!!



ランサーからは  
ソラウは死角  
奴の侵入に  
気付いた  
様子もない



束縛術式：対象1術宮切嗣  
 術宮の刻印が命ずるものなり  
 下記条件の成就を前提とし  
 誓約は戒律となりて例外なく対象を縛るもの也



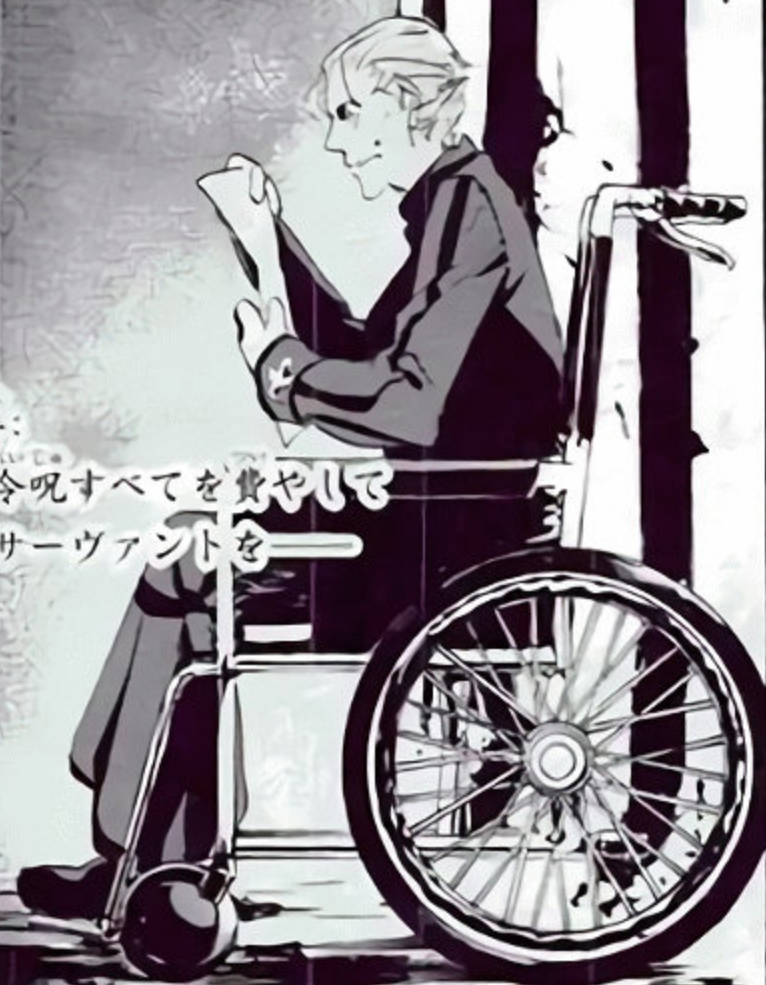
自己強制証文

たとえ命を  
 差したそうとも  
 次代に継承された  
 魔術刻印がある限り  
 死後の魂すらも  
 束縛される

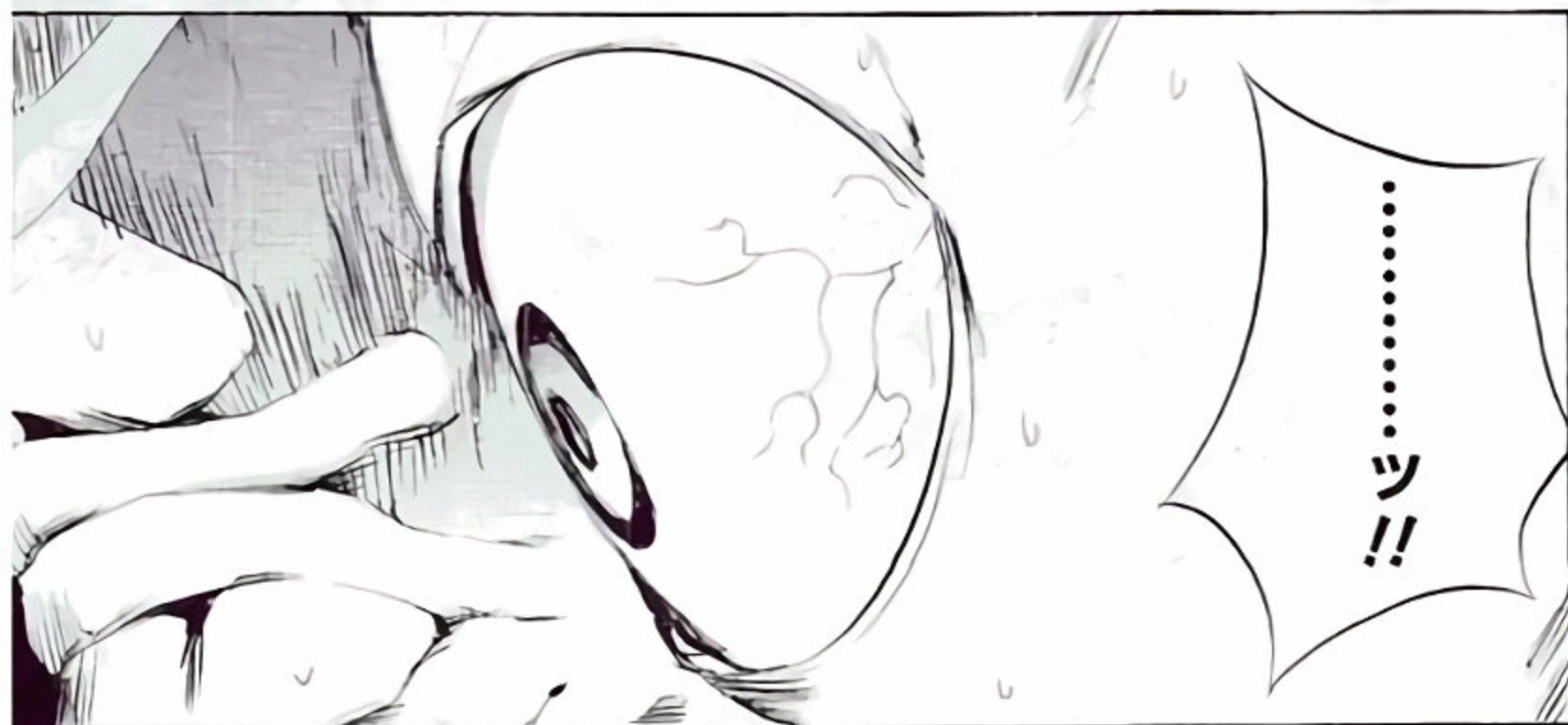
術者本人の  
 魔術刻印を用いた  
 自らにかける  
 解除不能の呪い

誓約：  
衛宮家五代継承者  
矩賢の息子たる切嗣に対し  
ケイネス・エルメロイ・アーチボルト  
並びにツラウ・ヌアザレ・ソフィアリの  
両人を対象とした殺害・傷害の  
意図および行為を永久に禁則とする

条件：  
残る令呪すべてを費やして  
己のサーヴァントを――



この証文を  
差し出した上での交渉は  
魔術師にとって最大限の  
譲歩を意味する！



.....  
ツ!!

書面は正式なものだ

宣誓者の血で記された署名には明らかに魔力が脈動し

すでに呪戒が術として成立し機能していることを証明している

そしてこの文言ならば別の解釈に至ることは無い

つまりこの条件が成立した時点であの男は解除不可能な呪いを受ける

この契約が交わされたならば奴は私たちに手出しできない！

だが少しでも契約の方針に躊躇いを見せれば――

奴の銃弾はソラウともども  
私たちの命を奪い尽くす!

選択の余地など  
どこにもない……

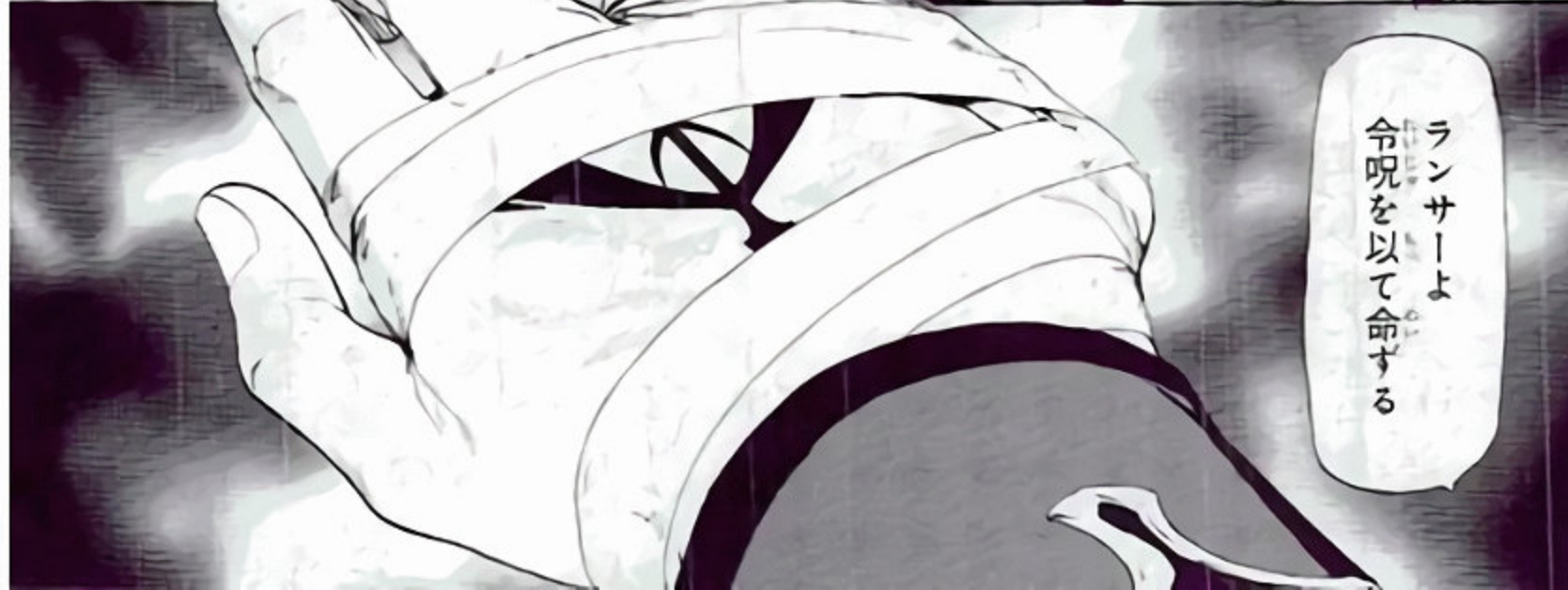
全てを道連れに命を失うか  
全てを喪つてなお自分と  
ソラウが生き延びるか……

ただそれだけの  
違いしかない







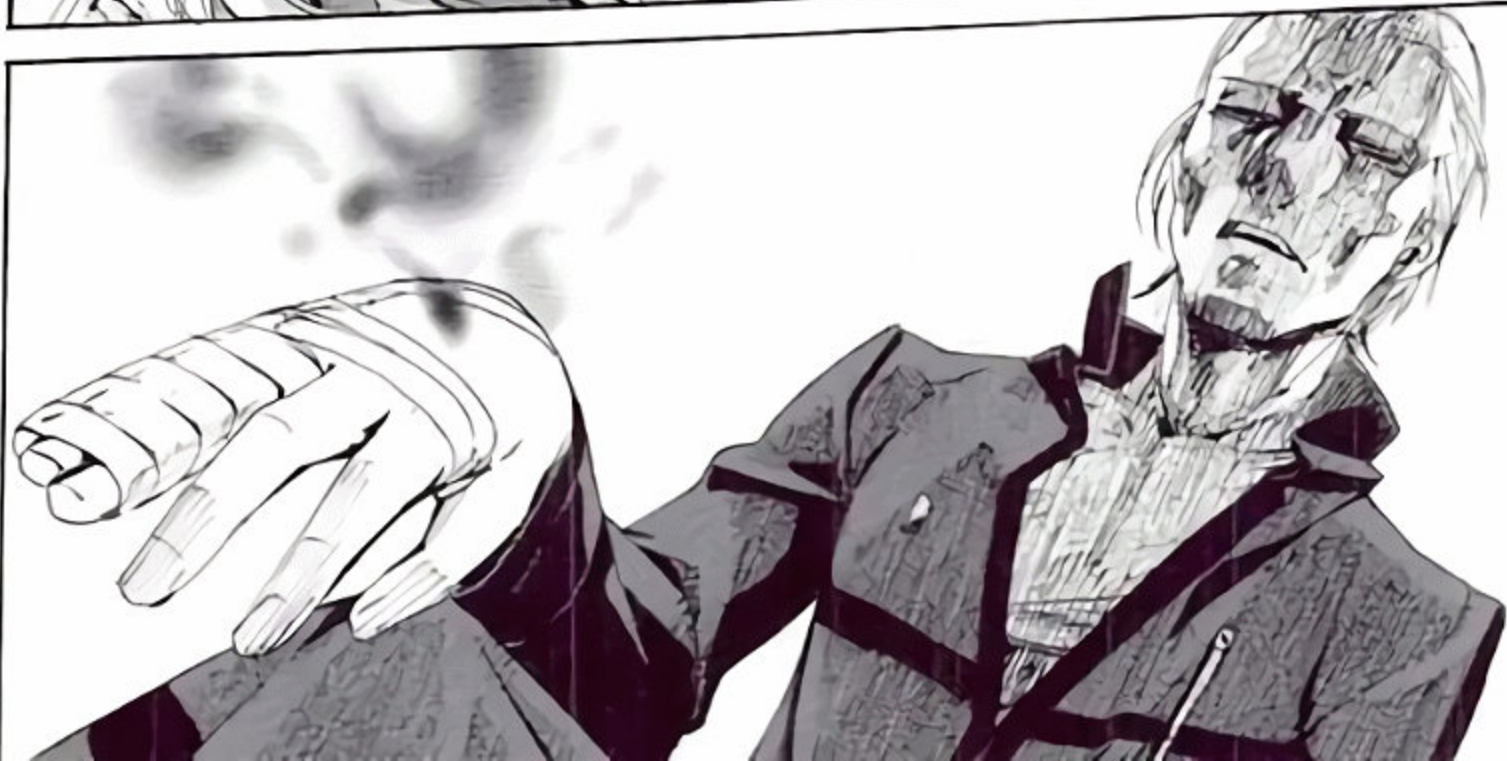


ランサーよ  
命呪を以て命ずる

自決せよ











そんなにも  
勝ちたいか!?

そうまでして  
聖杯が欲しいか!?

この俺が……  
たったひとつ  
懐いた祈りさえ  
踏みこじって……!

貴様らはッ!

何ひとつ  
恥じることも  
ないのか!?





赦さん……

断じて貴様らを  
赦さんツ！

名利に憑かれ  
騎士の誇りを  
貶めた亡者ども……

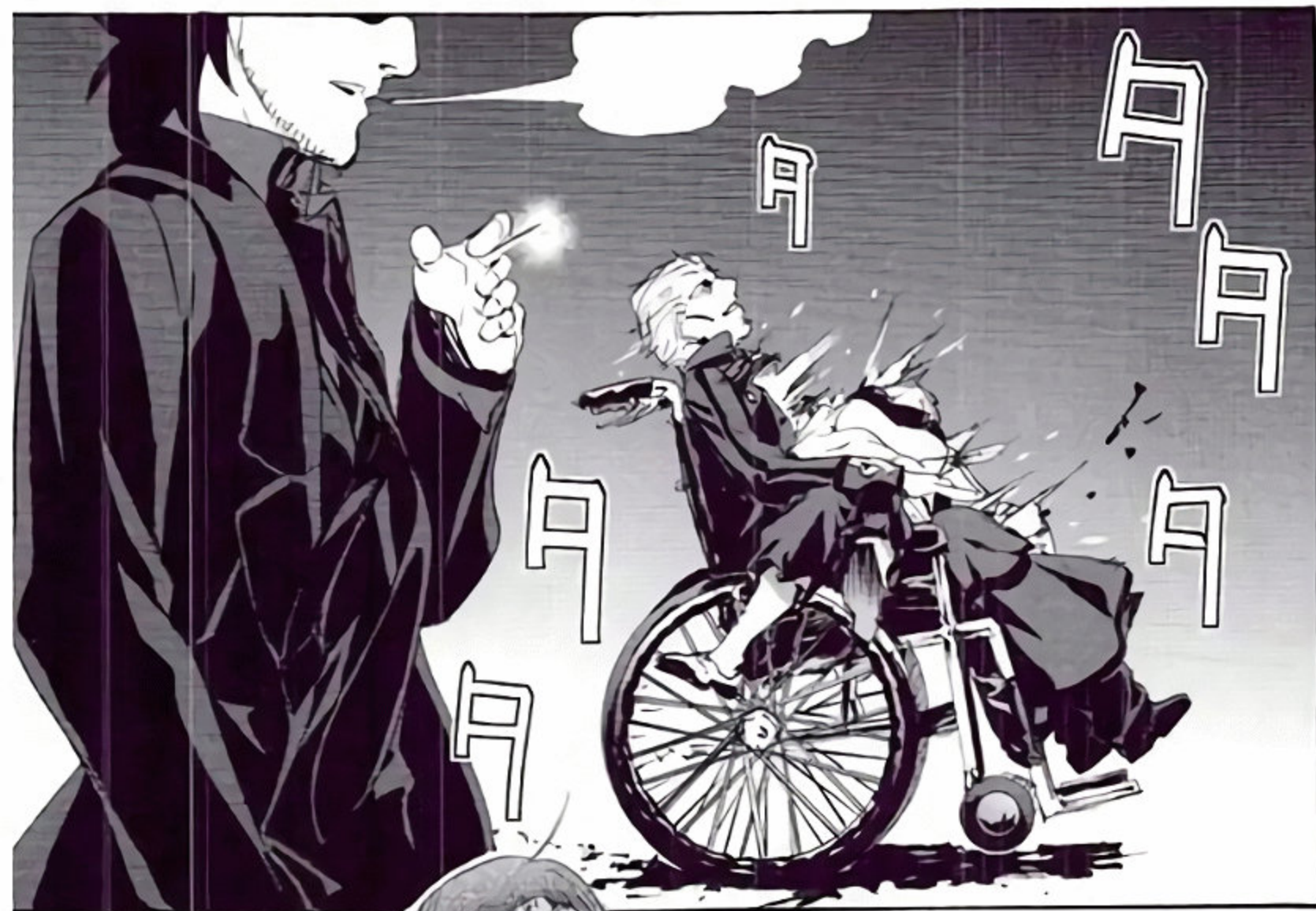
その夢を  
我が血で  
穢すがいい！

聖杯に  
呪いあれ！

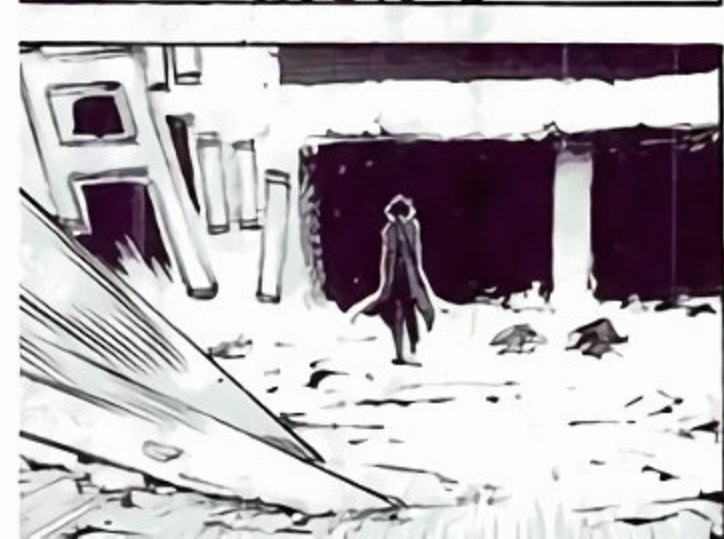
その願望に  
災いあれ！













今ようやく  
貴様を外道と  
理解した

道は違えど目指す  
場所は同じだと  
そう信じてきた  
私が愚かだった…

衛宮切嗣

私はこれまで  
アイリスフィールの  
言葉であれば信に足ると  
そう思ってた貴様の性根を  
疑うことはしなかった

答えろ  
切嗣！

だが今はもう  
貴様のような男が  
聖杯を以て救世を成す  
などと言われても到底  
信じるわけにはいかない

貴様は  
妻すらも  
虚言で踊らせて  
きたのか？

万能の願望機を  
求める真の  
理由は何だ!?





Fate   
フレイム



In the battleground, there is no place for hope.  
What lies there is just cold despair and a sin called victory,  
built on the pain of the defeated.  
The world as is, the human nature as always,  
it is impossible to eliminate the battles.  
In the end, killing is necessary evil-and if so,  
it is best to end them in the best efficiency  
and at the least cost,  
least time.  
Call it not foul nor nasty.  
Justice cannot save the world. It is useless.



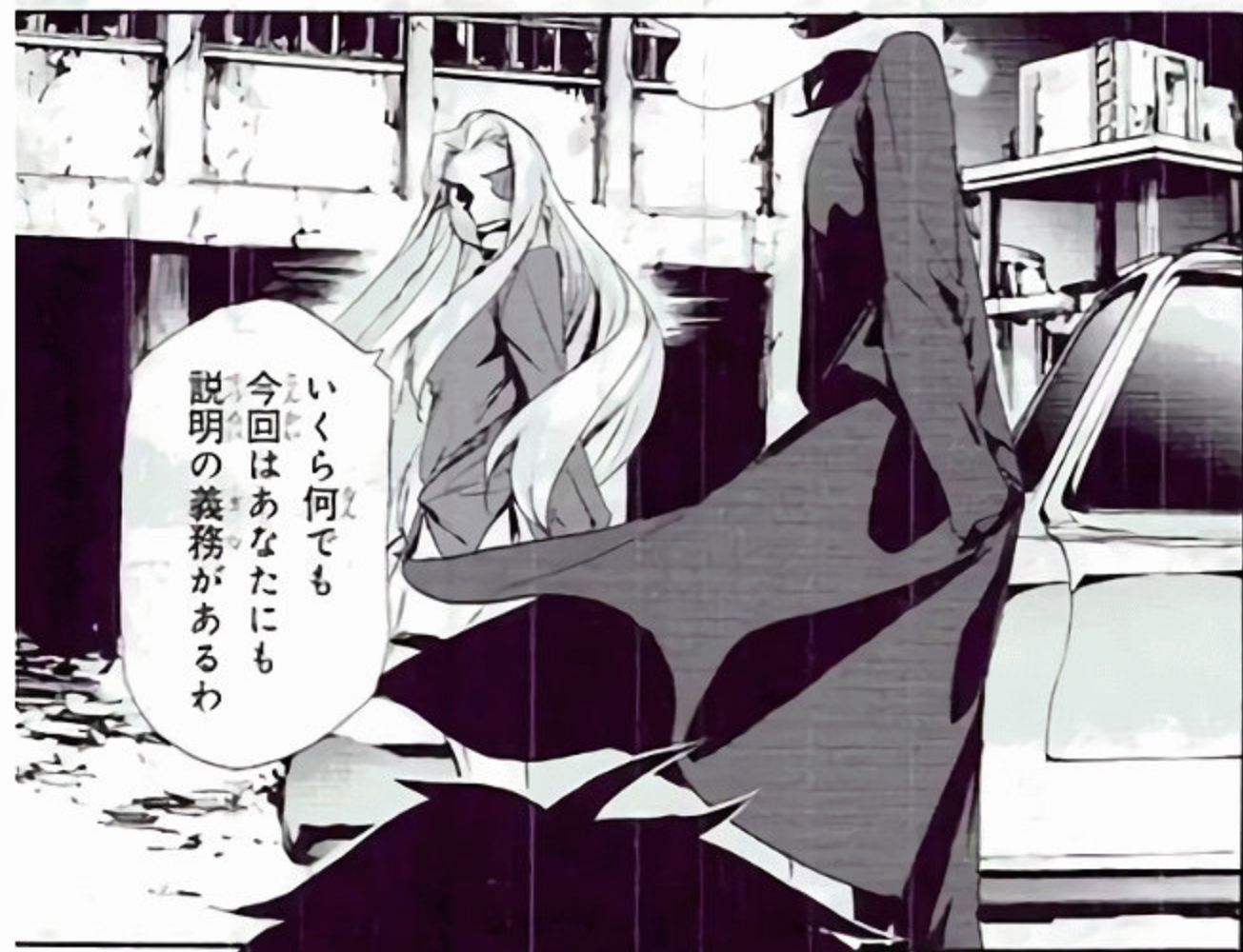
第 43 話



たとえ我が剣が  
聖杯を勝ち取った  
としても……

それを貴様の手に  
託す羽目になるの  
だとしたら私は……!





いくら何でも  
今回はあなたにも  
説明の義務があるわ



答えて切嗣



フッ

そういえば僕の  
殺し方を直に  
君に見せるのは  
これが初めて  
だったね アイリ

ねえ切嗣  
私ではなく  
セイバーに話して

彼女にはあなたの  
言葉が必要よ

いや

そのの  
サーヴァント  
には話すこと  
など何もない

栄光だの名誉だの  
そんなものを  
嬉々としてもてはやす  
殺人者には何を  
語り聞かせても無駄だ

騎士なんぞに  
世界は救えない

我が眼前で  
騎士道を穢すか  
外道ッ！

過去の歴史が  
そうだったように  
今これからも  
同じことだ

こいつらはな  
戦いの手段に  
正邪があると説き  
さも戦場に尊いものが  
あるかのように  
演出してみせる

歴代の英雄どもが  
そういう幻想を  
売り込んできたせいで

いったいどれだけの  
若者たちが武勇だの  
名誉だのに誘惑されて  
血を流して死んで  
いったと思う？

幻想ではない！

たとえ命の  
遣り取りだろうと  
それが人の営みで  
ある以上決して  
犯してはならない  
法と理念がある！

なくては  
ならない！

さもなくば戦火の度に  
この世には地獄が  
具現する羽目になる！

フン

ほら  
これだ



聞いての通りさ  
アイリ

この英霊様は  
よりもよって  
戦場が地獄より  
マシなものだと  
思ってる

冗談じゃない

いつの時代も  
あれは  
正真正銘の地獄だ


戦場に希望  
なんてない

あるのは  
掛け値なしの  
絶望だけ


敗者の痛みの上に  
しか成り立たない  
勝利という名の  
罪科だけだ

その場に立ち会った  
すべての人間は  
闘争という行為の  
悪性を愚かしさを  
弁解の余地なく  
認めなきゃならない


それを悔やみ  
最悪の禁忌と  
しない限り  
地獄は地上に  
何度でも蘇る



なのに人類は  
どれだけ死体の  
山を積み上げようと  
その真実に気付かない



いつの時代も  
勇猛果敢な  
英雄サマが  
華やかな武勇譚で  
人々の目を眩ませて  
きたからだ!



血を流すことの  
邪悪さを認めようと  
しない馬鹿どもが  
余計な意地を  
張るせいで!

人間の本质は  
石器時代から  
一歩も前に  
進んじやいない!!

—それじゃあ切嗣

あなたがセイバーに  
屈辱を与えるのは…  
英霊に対する  
憎しみのせい？

まさか  
そんな私情は  
交えないさ

僕は聖杯を  
勝ち取り世界を救う

そのための戦いに  
最も相応しい手段で  
臨んでいるだけだ

今の世界今の人間の  
在りようでは  
どう巡ったところで  
戦いは避けられない

最後には  
必要悪としての  
殺し合いが  
要求される

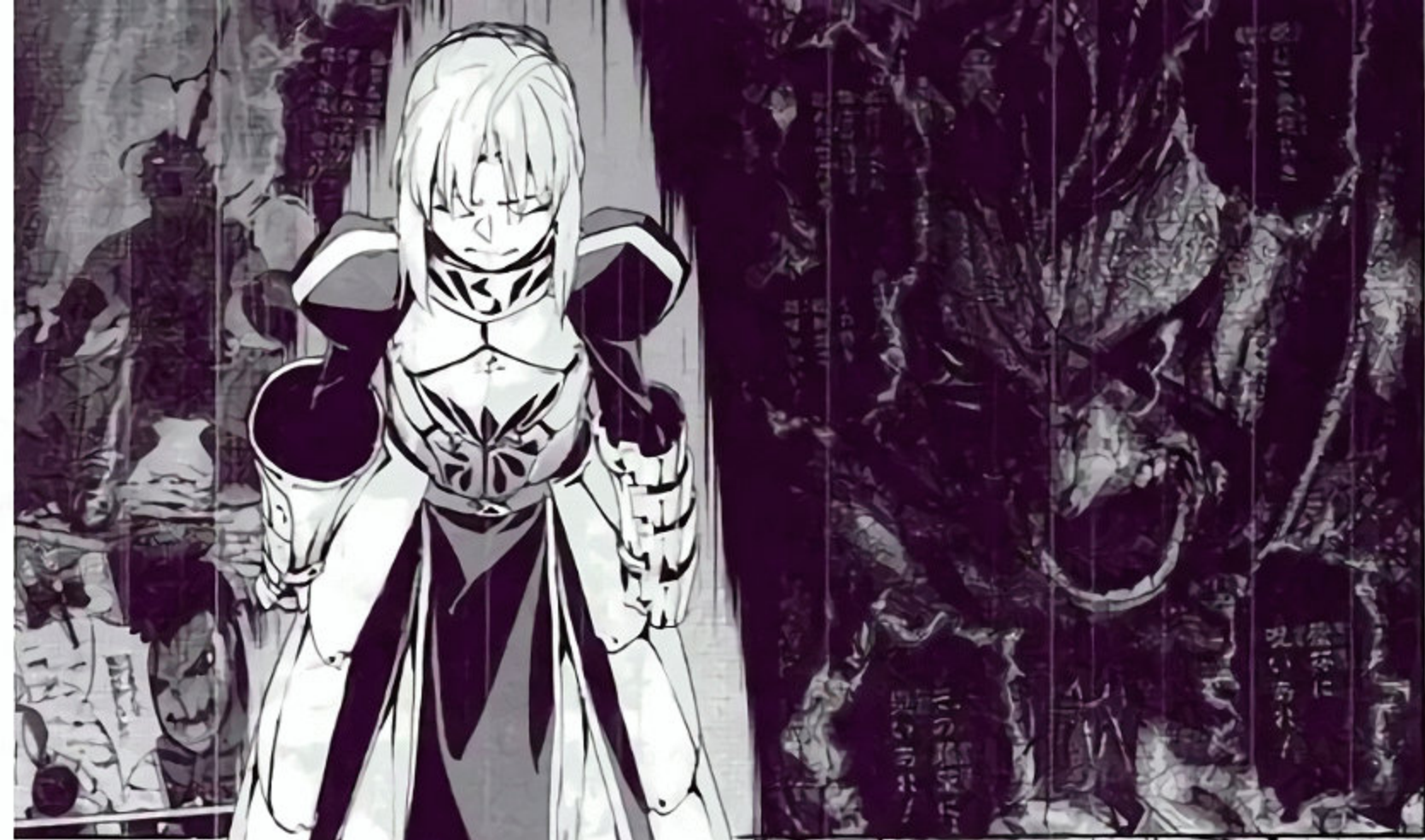
だったら最大の  
効率と最小の浪費で  
最短のうちに処理を  
つけるのが  
最善の方法だ

それを卑劣と  
蔑むなら  
悪辣と語るなら

—ああ  
大いに  
結構だとも

正義で世界は  
救えない

そんなものに僕は  
まったく興味ない





切嗣

若き日の本当の貴方は  
「正義の味方」に  
なりたかったはずだ



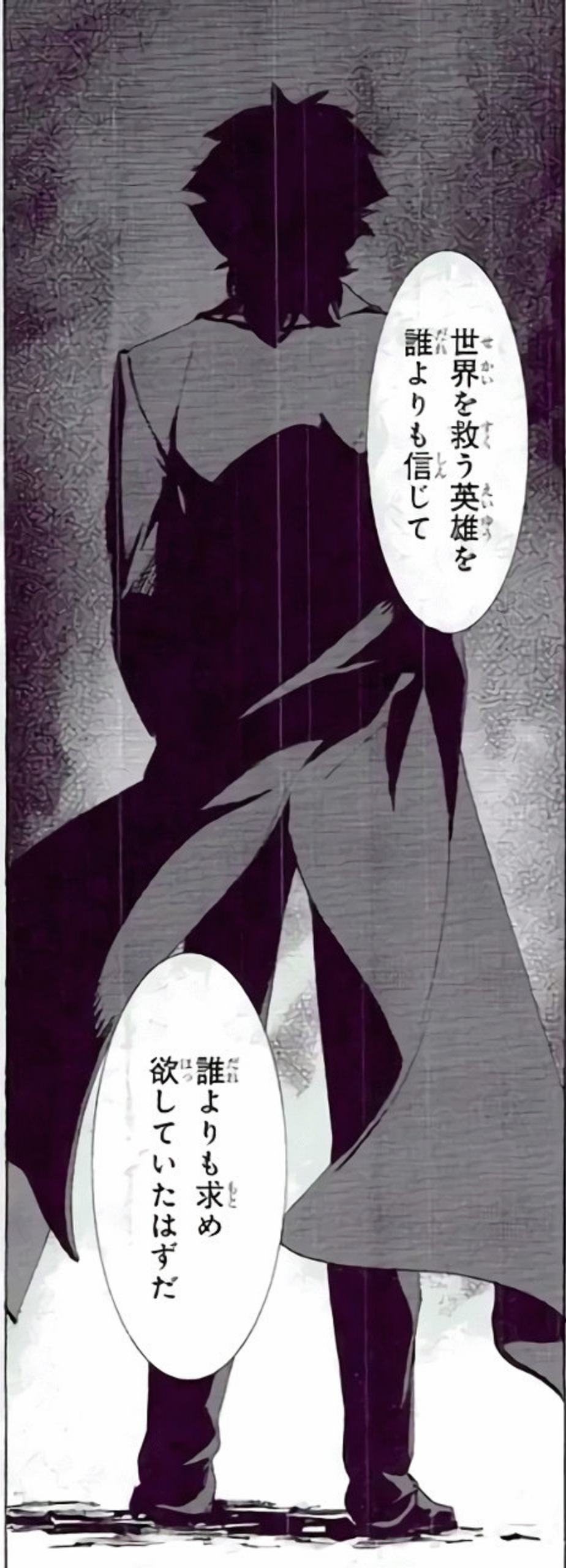
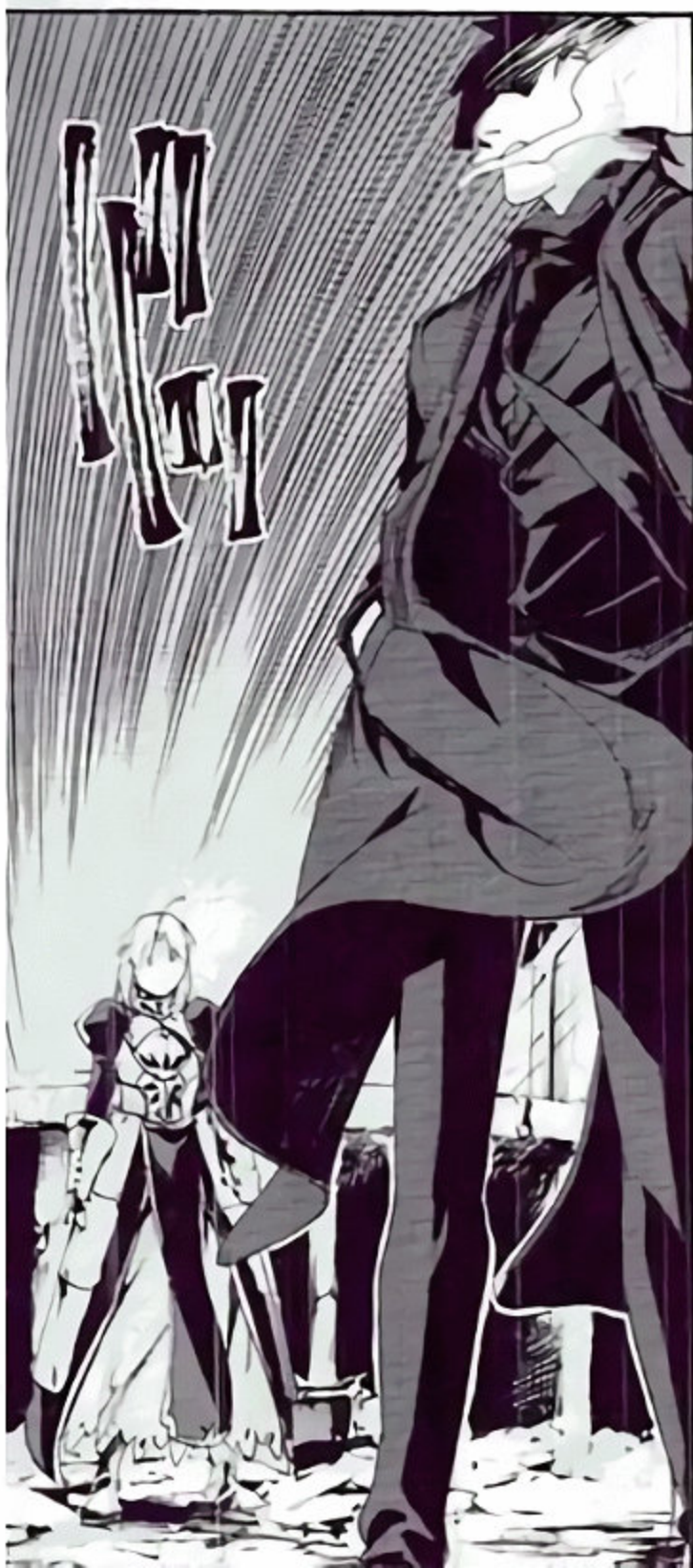
だがそれでも  
貴方は……



衛宮切嗣

かつて貴方が  
何に裏切られ  
何に絶望した  
のかは知らない

だがその怒り  
その嘆きは  
紛れもなく正義を  
求めた者だけが  
懐くものだ






トコ




切嗣！  
解って  
いるのか？






悪を憎んで  
悪を為すなら  
後に残るのも  
悪だけだ

そこから芽吹いた  
怒りと憎しみが  
また新たな  
戦いを呼ぶだろう



終わらぬ連鎖を  
終わらせる

それを果たし  
得るのが聖杯だ



世界の改変  
ヒトの魂の変革を  
奇跡を以て  
為し遂げる

僕がこの冬木で  
流す血を  
人類最後の流血に  
してみせる



そのためにたとえ  
この世の全ての悪を  
担うことに  
なろうとも――

構わないさ

それで世界が救えるなら  
僕は喜んで引き受ける

……ッ





アイリスフィール？

切嗣は……  
もう行ったわね？



気を確かにッ！

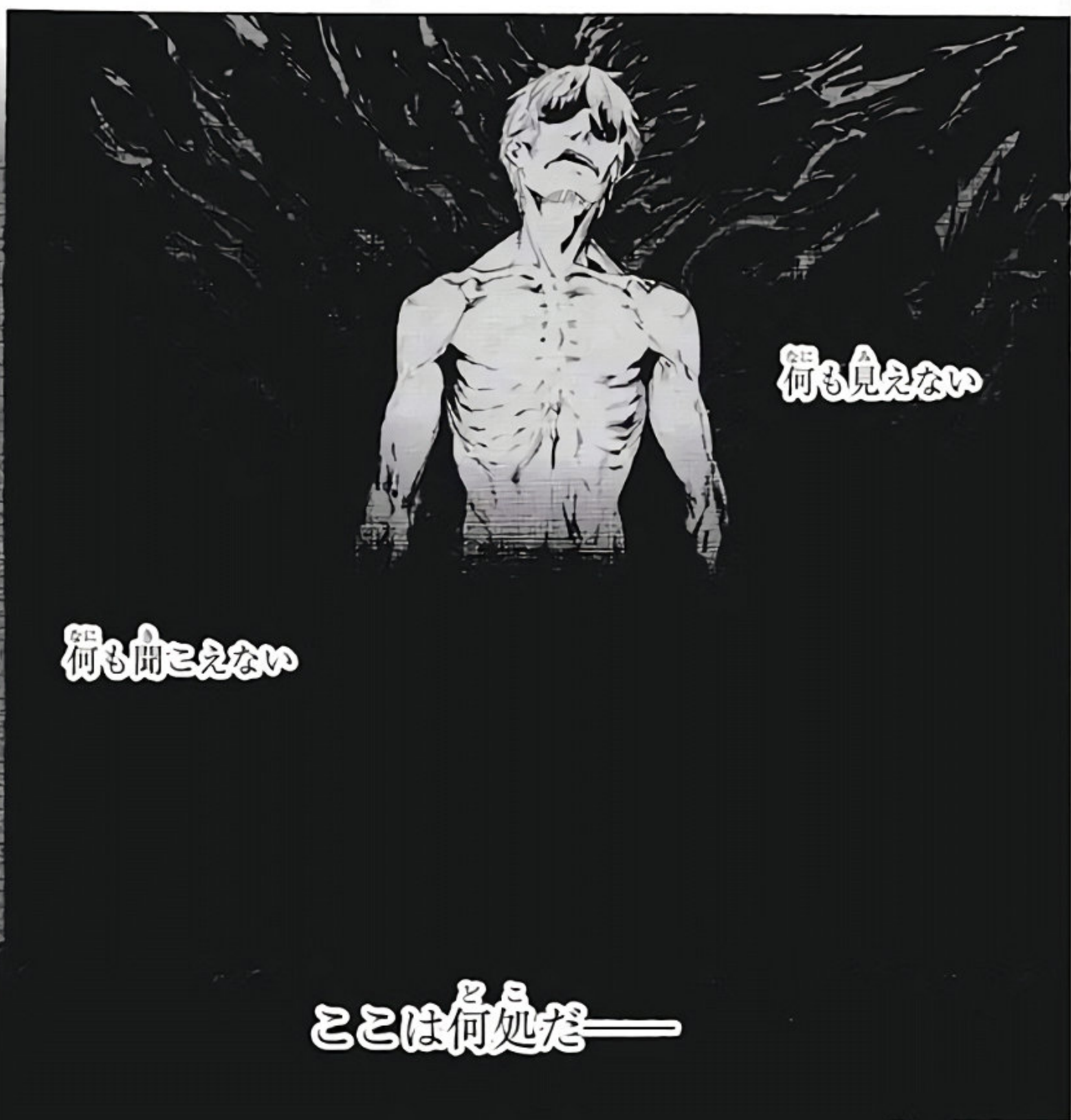
アイリスフィール!?



アッ



—65:49:08



何も見えない

何も聞こえない

ここは何処だ——



おまえは誰だ?




嘲られし者

我は疎まれし者

蔑まれし者





我が名は賛歌に値せず——

我が身は漢望に値せず——

我は英霊の卵が生んだ影——

眩き伝説の陰に生じた闇——



故に我は憎悪する——



私は怨嘆する——

闇に沈みし者の嘆きを糧にして  
光り輝くあの者たちを呪う——



あの貴影こそ我が恥辱——

その昔れが不朽であるが故  
我もまた永久に貶められる

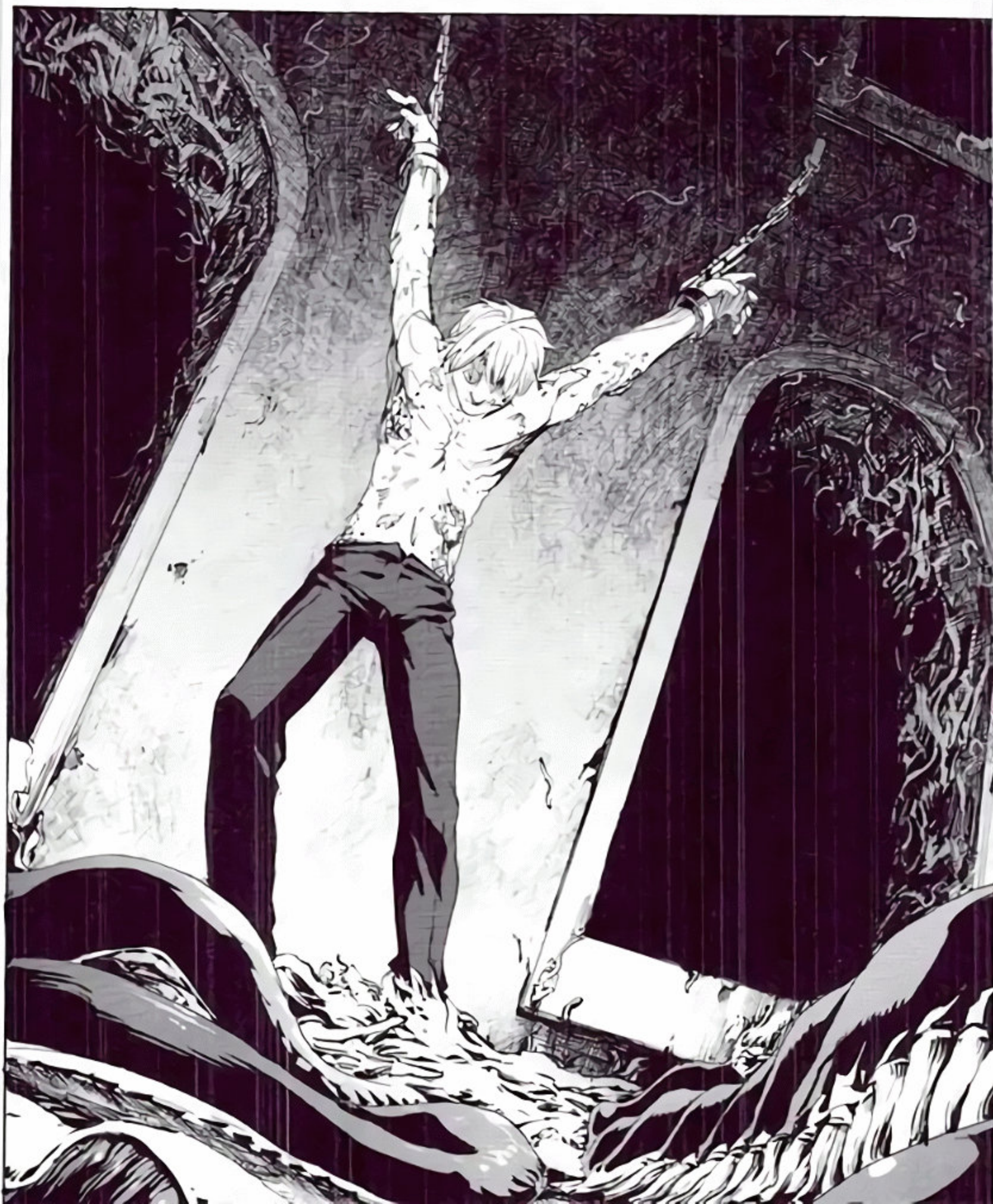


貴様は賢だ——













まったく

随分なザマに  
成り果てたのう  
雁夜よ



呵々々



勘違いするで  
ないぞ

ワシはなにも  
責めておる  
わけではない

これだけの  
手傷を負って  
よくぞ生き  
長らえたまま  
戻ったものよ

既に三人の  
サーヴァントが  
果て残るは四人

誰に助けられた  
のかは知らんが  
貴様は此度の勝負に  
かなりの運気を  
味方につけて  
おるようだな

これはひよつとすると  
この博打でワシが  
大穴を引き当てる  
可能性もあながち  
捨てたものではない  
かもしれん

そこで――

改めてひとつ  
掛け金を上乗せ  
してみるのも  
悪くない

雁夜よ

貴様にはワシが  
ここ一番の局面に  
備えて秘蔵して  
おいた切り札を  
授けてやる

さあ――







ののののの  
ののののの

わっ...

呵々々ッ!

呵々々々々ッ





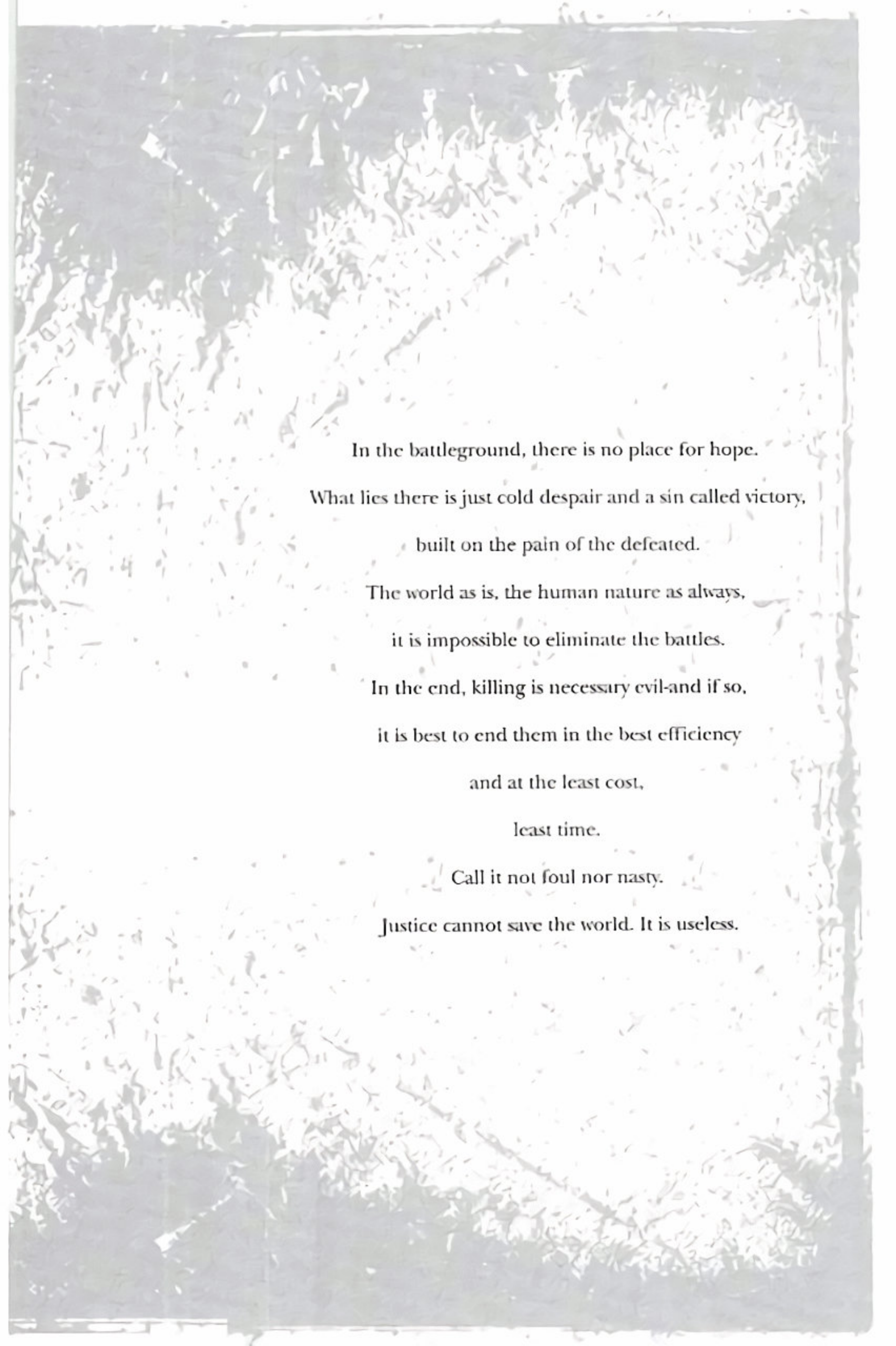


桜……ちや……

ひ……

ひ……

Fate *Zero*  
2011-2012



In the battleground, there is no place for hope.  
What lies there is just cold despair and a sin called victory,  
built on the pain of the defeated.

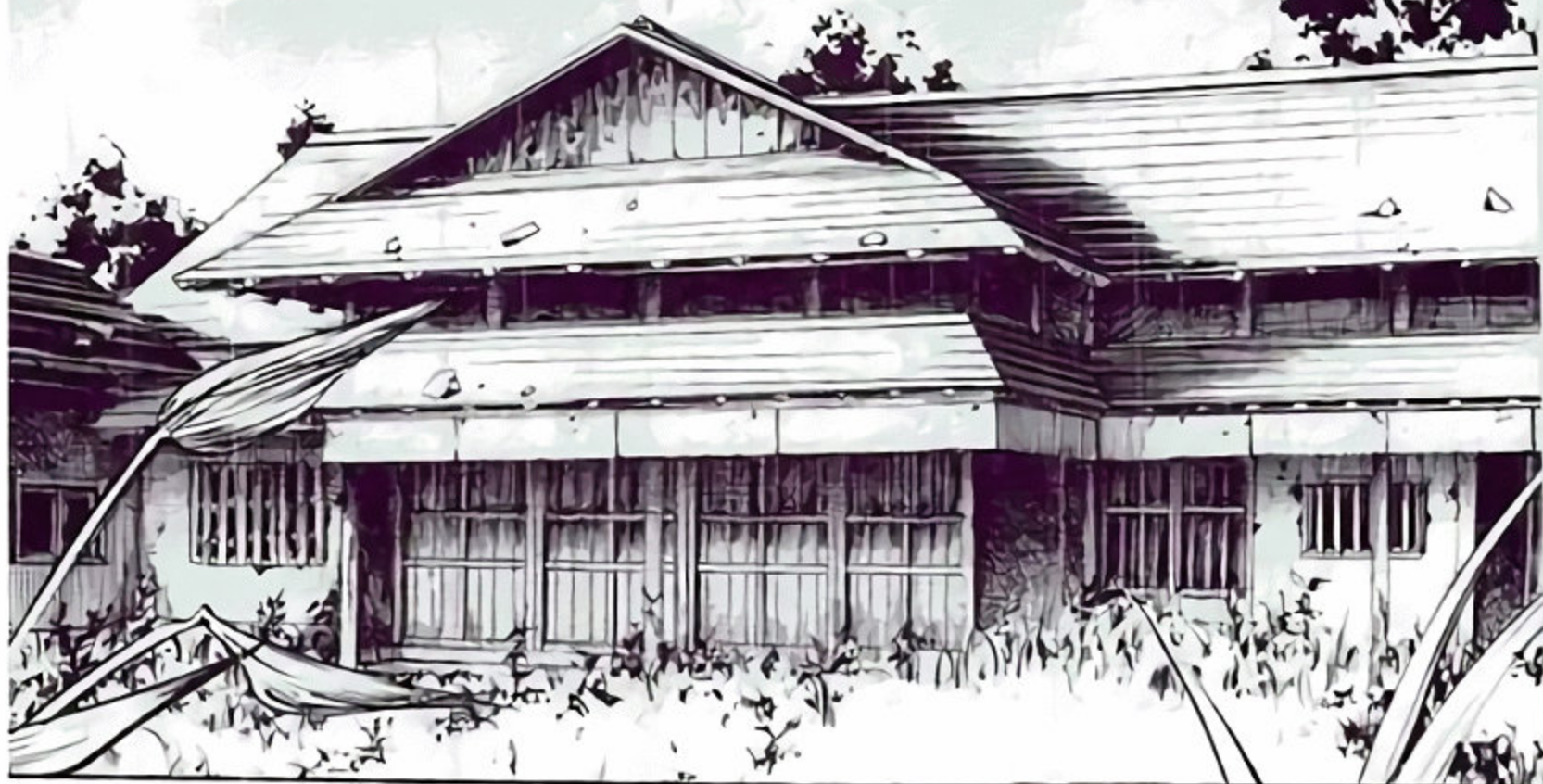
The world as is, the human nature as always,  
it is impossible to eliminate the battles.

In the end, killing is necessary evil-and if so,  
it is best to end them in the best efficiency  
and at the least cost,

least time.

Call it not foul nor nasty.

Justice cannot save the world. It is useless.



—64:21:13



だがこんなにも  
急激に容態を悪化  
させるような原因は  
思い当たらない



彼女は傷を  
負ったわけでも  
殊更に過酷な運動を  
したわけでもない



たしかに昨日の  
朝の段階で既に  
兆候はあった

アイリスフイールは  
それをホムシクルス  
としての構造的欠陥  
と口づけていた



# 第 44 話



ん……



……セイバー……？

アイリスフィール  
具合はどうですか？

……ええ  
うん

もう大丈夫  
みたい

……

どうやら心配  
させてしまった  
みたいね

御免なさい

い……いえ  
本当に大丈夫であれば  
それに越したことは  
ないので……

しかし……

ええあなたの  
言いたい事は  
解るわセイバー

どうやら私  
ここにきて色々  
問題があるみたい

こうやって  
安静あんせいにしていれば  
平気へいせいだけれど――

もうこの先は  
あなたの隣で  
サポートを続けるのは  
無理むりかもしれない

御免ごめんなさいね

不甲斐ふがいないとは  
思うおもうだけれど  
あなたの足手あしでまとい  
になるよりは――



アイリス  
フィール……

いや  
そうではない

むしろ自重じじゆうして  
くださったのは  
助たすかります

私わたしはてつきり貴女あなたが  
無理むりを押すのを諫め  
なければならぬ  
のかと身構みかまえていた  
もので……

そういう心配しんぱいは  
ご無用ごむいようよ

私たち  
ホームクルスは  
人間にんげんと違ってね  
ちゃんと自分の  
身体からだの構造こうぞうを把握とら  
してらんだから

燃料切れのランプが  
灯るのを無理むりして  
隠かくそうとするような  
自動車じどうしゃがあったら  
そんなのは真正銘まことなまの  
故障こわでしょう？

……



……たしかに貴女は  
事実として人造の  
存在かもしれないが

私はそれを普通の  
人間と区別して  
考えることは  
決してしない

だからどうか貴女も  
必要以上に自分を  
卑下するような  
言い方はやめてほしい

……優しい  
わね

セイバーは

貴女という人に  
触れた者ならば  
誰もがそう思って  
当然です

貴女はひとときわ  
以上に魅力的な  
人柄の持ち主だ

女性であれば  
往々にして  
体調の不如意が  
あるのは当然です  
養生に  
気兼ねなど  
いらぬ

それを言ったら  
あなただって  
女の子でしょうに

——その色々と大変  
だったんじゃないの？  
ずっと男のふりをして  
なきやならなかった頃は

いやそれが  
ですね

ご存じかもしれませんが  
生前の私はとある宝具の  
加護を受けていました

無病息災どころか  
老化さえ止まり  
こと体調においては  
ありとあらゆる  
不都合から解放  
された身でした

一〇年経っても  
姿形は見ての通り  
の有様で――

何はともあれ  
アイリスフィール

心配することは  
何もありません

確かに貴女の  
掩護は心強かったが  
敵の数も残り少ない

たとえ  
私単独であろうと  
十分に戦い抜いて  
いけるでしょう

……セイバー

あなたが本当に  
「単独」であったなら  
私だって心配はしないわ



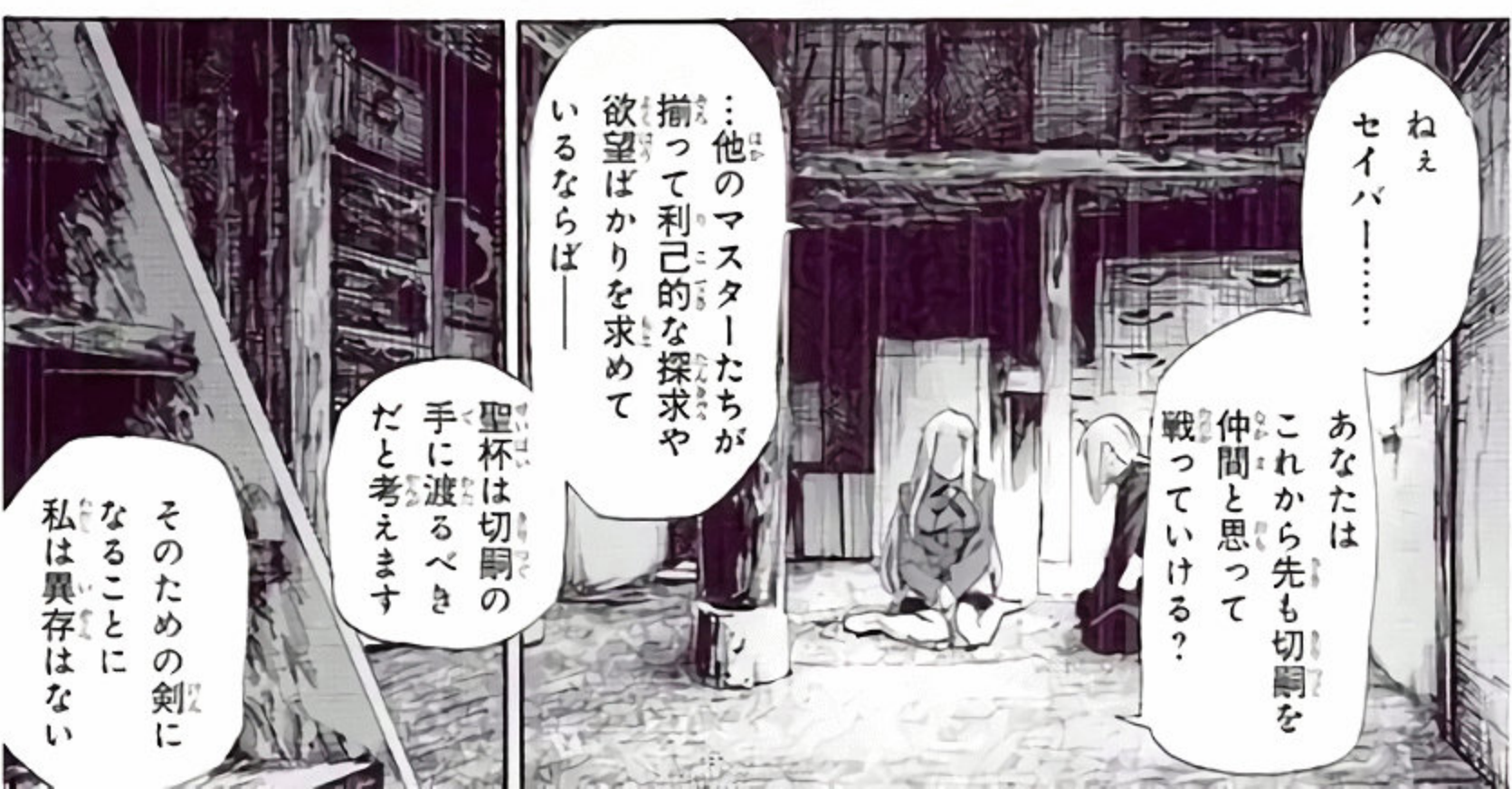
ねえ  
セイバー……

あなたは  
これから先も切嗣を  
仲間と思っ  
戦っていいける？

…他のマスターたちが  
揃って利己的な探求や  
欲望ばかりを求めて  
いるならば――

聖杯は切嗣の  
手に渡るべき  
だと考えます

そのための剣に  
なることに  
私は異存はない



——だが願わくば  
剣となるのは  
私一人であってほしい

切嗣に  
彼なりのやり方で  
介入されるのは

もう二度と耐え難い

マスター自らが手を  
汚すまでもなく  
サーヴァントである  
私が確実に勝利を  
勝ち取れるものと

そう切嗣を納得  
させられるような  
戦いを演じていく  
しかないでしょう

残る  
サーヴァントは  
三人

私としても  
意地に懸けても  
負けられない  
相手ばかりだ

コソコソ

「确实な勝利」という言葉の意味合いそのものが「騎士王」と「魔術師殺し」では雲泥の差がある

敗北に繋がるすべての可能性を徹底的に排除するという周到さ

勝利を掴むまで不屈の闘志で何度でも立ち上がるという意気込みと

どちらも目指すところは同じでもその過程は致命的なまでに違う……





……聖杯はね  
私にとっては  
自分自身も同然なの

それを降臨させる  
ための「器」を私は  
生まれてからずっと  
預かってきたから

聞いています

貴女が  
「器の守り手」を  
務めていることは



以前召喚されて  
間もない頃にも  
誓いました

貴女を守り抜き  
最後まで勝ち残ると

あの言葉は  
違えるつもりは  
ありません



……だから  
私の「宝」はね

どうあっても私の  
愛する人たちの手で  
受け止めてほしい

夫と——  
それからセイバー  
あなたにね



……

もし仮に

「始まりの御三家」の  
当初の目的である  
根源への到達を  
果たそうと思うなら

最後にセイバーにも  
令呪で自害を強要し  
七人全ての英霊が聖杯への  
供物となる形で戦いを  
終えなければならぬ

けれど二全ての闘争を  
終結させるという願望  
——世界の改変は  
所詮内側の奇跡の  
域を出ない祈り

「根源の渦」を目指して  
世界の外側へまで  
到達しようという試みに  
比べれば生易しい話

切嗣とセイバーの  
願望を共に叶えるには  
敵対する六人の英霊で  
魔力は十分に補える

問題は敵の強大さより  
むしろ切嗣とセイバーの  
両の軋轢だわ

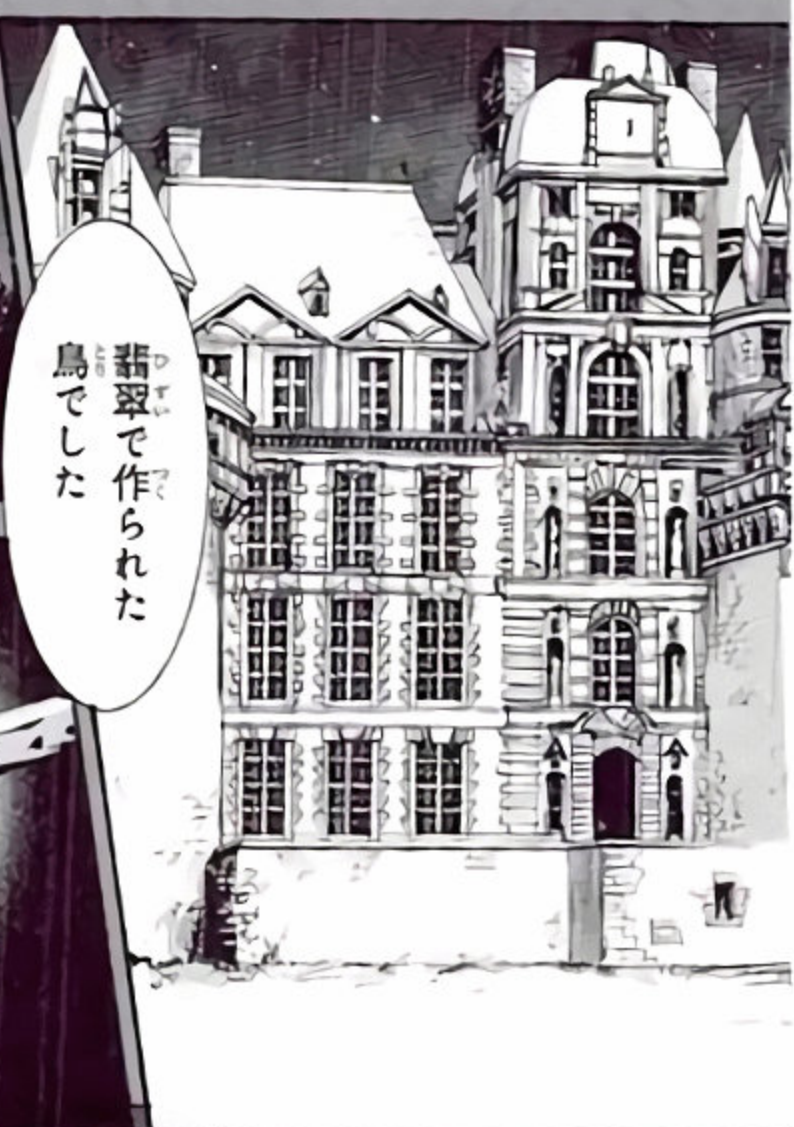
在り方も信念も  
まるで食い違う  
二人の衝突は免れない

ならせめてそれを  
可能な限り緩和  
することが私の役目

けれど  
私にはもう——



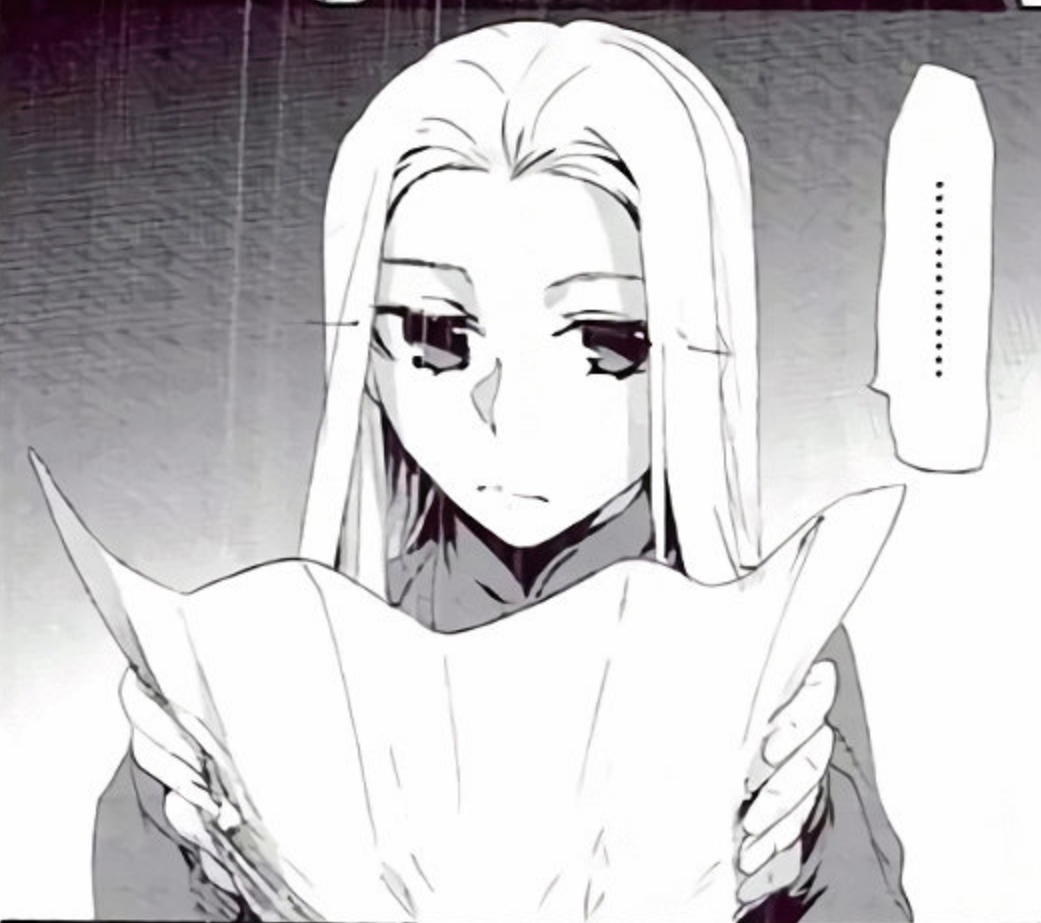




翡翠で作られた  
鳥でした



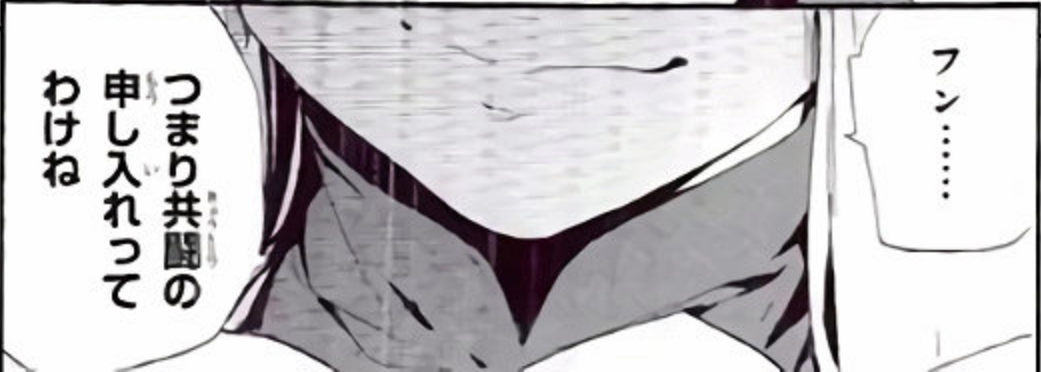
切嗣の話だと  
たしかに遠坂の  
魔術師が好んで  
使う傀儡だそうです



.....



聞いた話では  
確かにそうですね



フン.....

つまり共闘の  
申し入れて  
わけね

同盟ですか？  
今になって？

残るライダーと  
バーサーカーの対処に  
遠坂は不安を  
持つてるんでしょね

そこで一番  
与しやすいと  
見えた私たちに  
誘いをかけてきた

——要するに  
他の二組に比べれば  
舐められてるってこと

交渉に応じる  
気があれば  
今夜零時に冬木教会で  
待っているって

中立を貫くはずの  
聖堂教会の監督役が  
よくもそんな会見を  
許可したものね

それが既に  
監督役の神父は  
死亡している  
そうです

今の聖杯戦争は  
監督役が不在の  
状況だとか

切嗣が言っていた  
遠坂と教会の繋がりも  
これで裏が取れた  
ようなものだから

味方につけていた  
監督役が死んで  
慌てて策を  
講じてるのね

……アイリスファイール  
相手はあのアーチャーを  
従えている魔術師です

信用に足るとは  
思えない

今の私は  
左手の傷も癒え  
万全の状態です

同盟など結ぶ  
までもなく

ライダーも  
バーサーカーも  
私一人で討ち  
取って見せる

無論アーチャーとして  
例外ではありません

セイバーの言い分も  
尤もだけれど  
遠坂からまた別の形での  
譲歩を引き出す  
という手もあるわ

相手にあって  
私たちには  
ないもの――

たとえば情報とかね

確かに

もし仮に遠坂が  
ライダーの陣営の拠点を  
掴んでいるのであれば  
それは裏を弄してでも  
聞き出す価値があります

相変わらず  
掴めて  
いないの？

ライダーと  
そのマスターは常に  
高速の飛行宝具で  
姿を現すので  
陸路から後を追うのは  
不可能なのです

あんな子供に  
切嗣が手を  
焼くなんて

私の蝙蝠も  
あのスピードには  
とても追いつけず  
追跡は失敗して  
ばかりです



……姿を隠す  
手際についてはあの  
ロード・エルメロイ  
より優秀ってわけ？

意外ですが

この冬木で魔術師が  
工房を設えそうな  
場所は全てチェック  
しているのです

なのにライダーの  
マスターだけは  
どうしても網に  
かからない



ぐうう  
所持金が……

その頃——



しかしそんな情報を  
トオサカのマスターが  
把握している可能性が？

遠坂時臣は今回  
聖杯戦争において  
かなり初期の段階から  
周至な準備を進めています

監督役の件が  
好例です  
それに——

—それに遠坂は  
アサシンのマスターを  
裏で操っていたと  
思われる節がある

あの男が  
言峰綺礼に対して  
影響力を及ぼしうる  
立場にいるのなら  
今回の誘いは  
無視できないかと

コトミネ……？

憶えておいて  
セイバー

今回の聖杯戦争で  
もし切嗣を負かして  
聖杯を獲る者が  
いるとしたら……

切嗣自身が  
そう言っていた

それが言峰綺礼  
という男よ

彼は事の始まりから  
この綺礼という男を  
天敵としてマーク  
していたの

この話  
受けましょう

同盟を結ぶか  
どうかはさておき  
遠坂の手の内には  
探りを入れる  
必要があるわ

今夜の冬木教会で  
それを確かめさせて  
もらおうじゃない



私に？

あなたが  
メルセデスを充分に  
乗りこなしている  
という話だったので

はい

切嗣の指示で  
より市街戦向けの  
機動手段を用意  
しておきました

ところでセイバー  
今日はあなたにも  
用件が

それは心強い

あの「自動車」よりも  
なお戦向きな機械とは  
願ってもない支援です

いま門の外に  
停めてあります

使い物に  
なるかどうか  
確認しておいて  
もらえますか？

是非にも

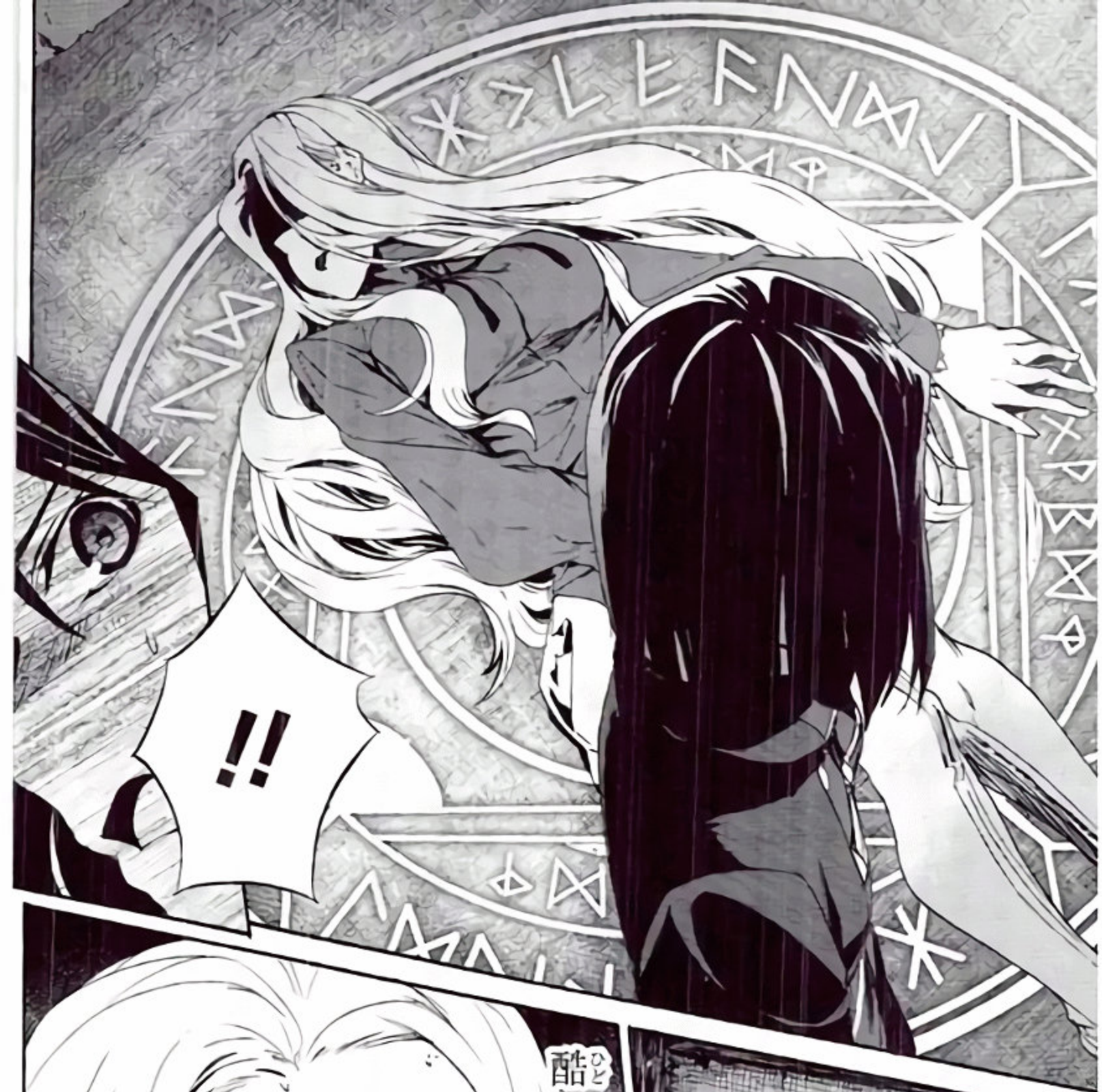
どう見ても  
やや大人びた  
小柄な少女にしか  
見えないが……

あれがかつて  
戦乱の時代を  
塗り替えた武勲の  
王であるとは

!

ドサ





ひどい熱……



ま  
マダム？  
……どうしました!?



……ちょっと……  
可愛い……

……ウフフ  
舞弥さんも……  
慌てることって  
……あるのね



馬鹿なことをツ  
それどころ  
ではない！



……セイバーは……  
見てないわよね？

マダム  
貴女の身体に  
いったい何が……



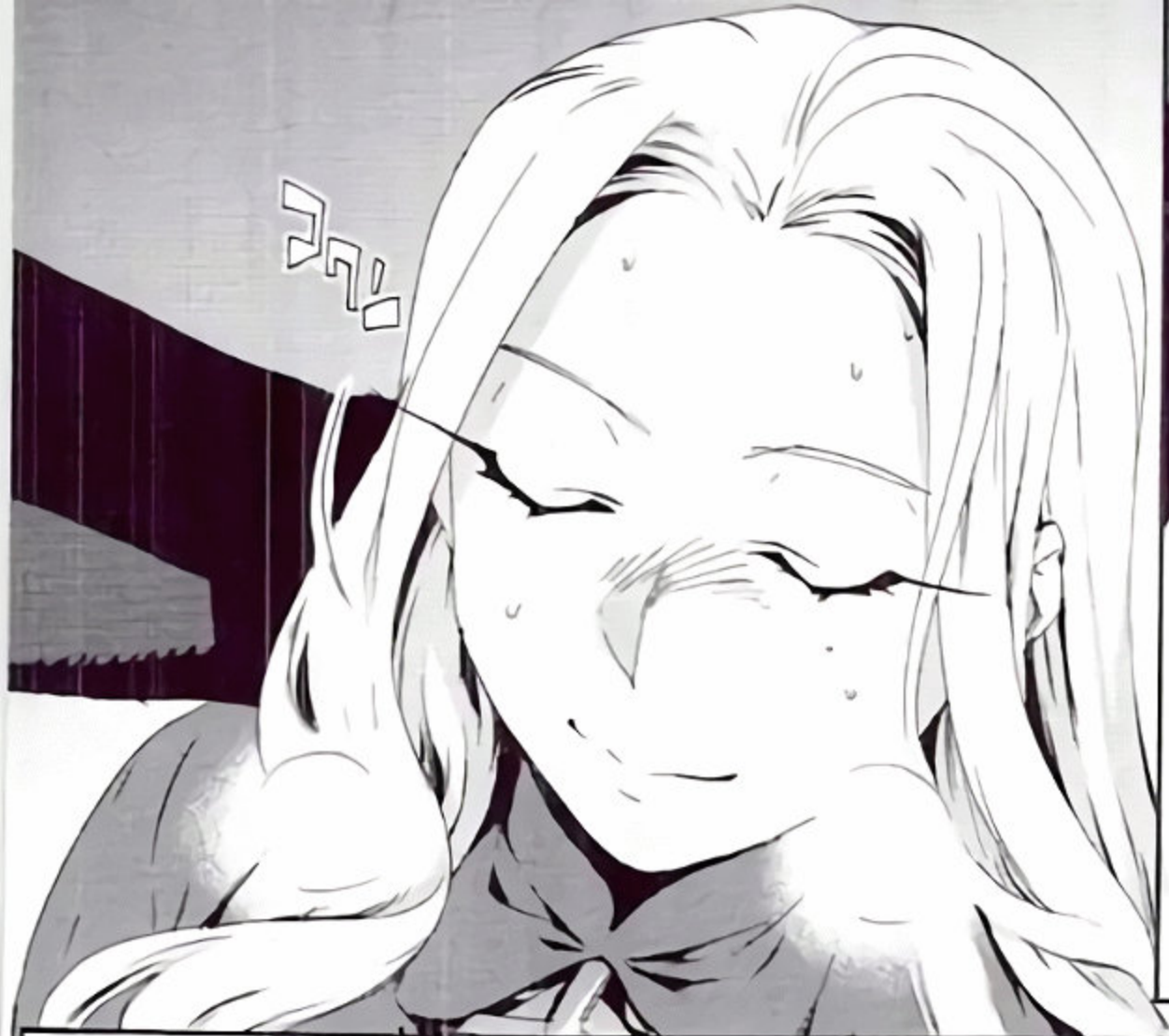
異常では  
ないのよ

これは——予め  
決まっていたこと

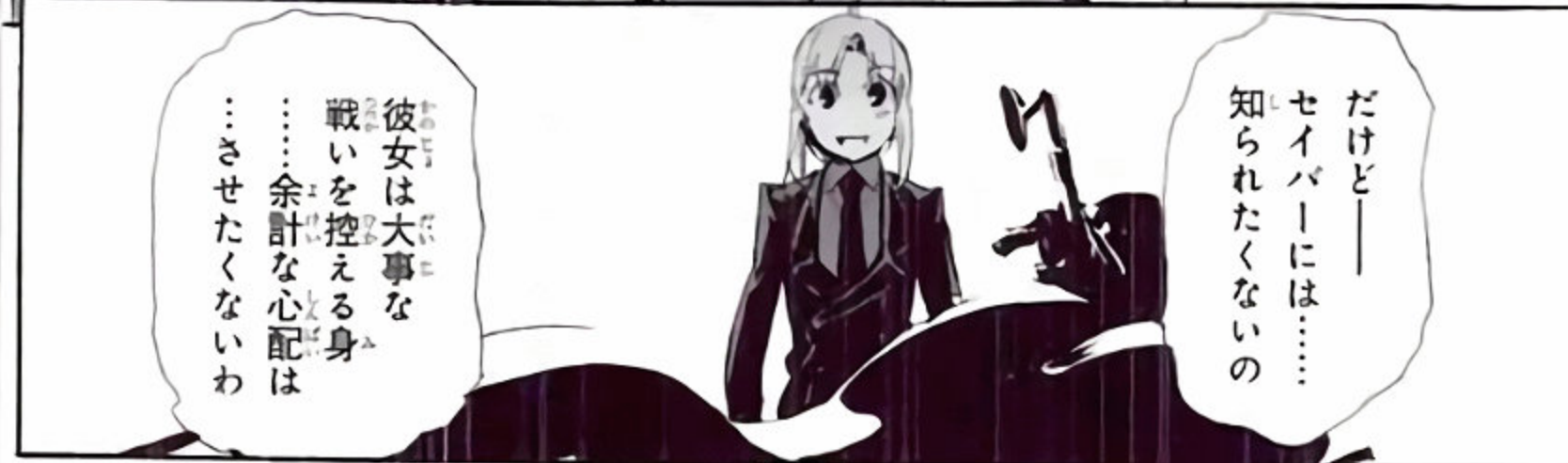
むしろ今まで  
「ヒト」として機能  
できたことの方が  
私にとっては奇蹟  
みたいな幸運だったの



すぐにもセイバーと  
それに切嗣を  
呼んできます



……切嗣も  
承知の上なのですか？

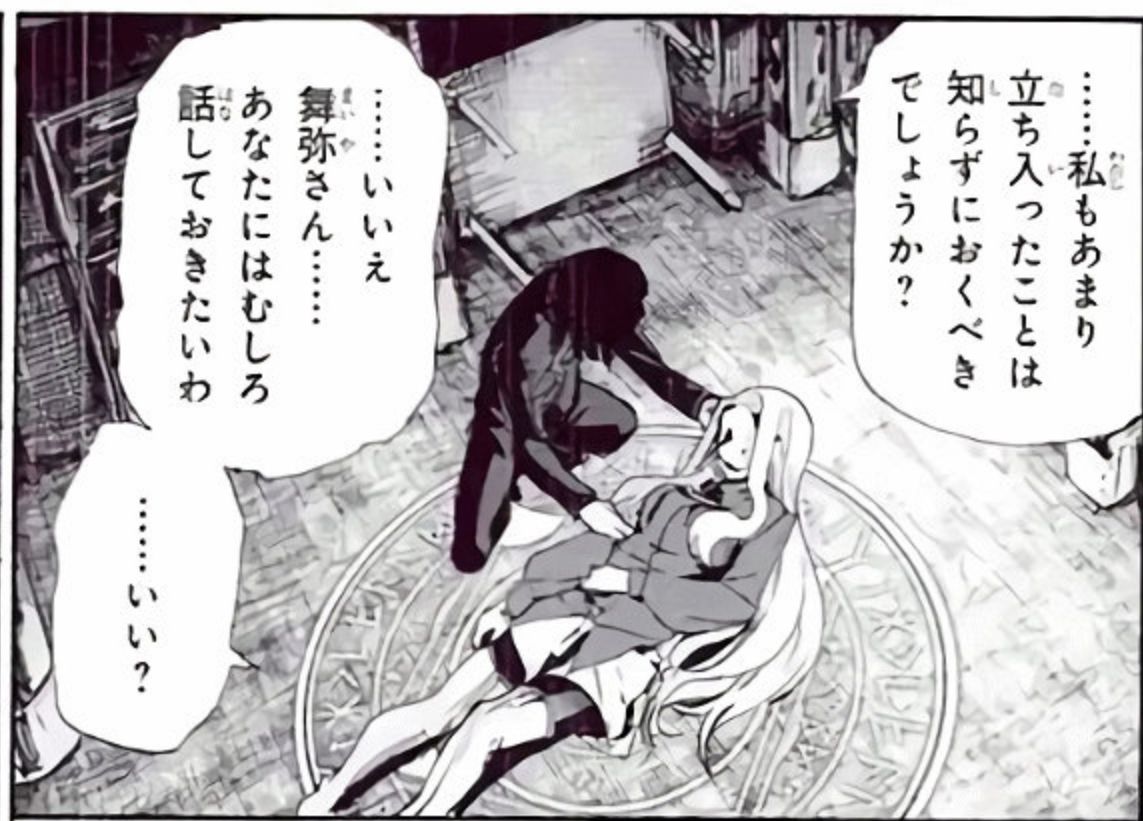


彼女は大事な  
戦いを控える身  
……余計な心配は  
……させたくないわ

だけど——  
セイバーには……  
知られたくないの



わかりました



……私もあまり  
立ち入ったことは  
知らずにおくべき  
でしょうか？

……いいえ  
舞弥さん……  
あなたにはむしろ  
話しておきたいわ

……いい？



大丈夫です

今ならセイバーに  
聞かれることはない

私は聖杯戦争の  
ために設計された  
ホームクルス……



それはあなたも  
知っているわね？

器の守り手

聖杯を降霊するための  
依代としての「器」を  
管理し運搬する  
っていう私の役目は  
本当は説明として  
正しくないわ

……はい



前回の聖杯戦争で  
アハトのお爺様は  
サーヴァント戦に  
負けただけでなく

何より重要な  
聖杯の「器」までも  
乱戦の中で破壊  
されてしまったの

三度目の戦争は勝者が  
決まるより先に「器」が  
喪われたことで  
無効になってしまった

そのときの  
反省を活かして  
お爺様は「器」に  
自己管理能力を備えた  
ヒトガタの包装を  
施すことにしたのよ

それが――

私

「器」そのものに  
生存本能を与え  
あらゆる危険を  
自己回避して聖杯の  
完成を成し遂げるため

お爺様は「器」に  
「アイリスフィルター」  
という擬装を施したのよ

そんな……

では貴女は……

既にサーヴァントは  
三人が消滅し  
いよいよ戦いは  
大詰めになってきた

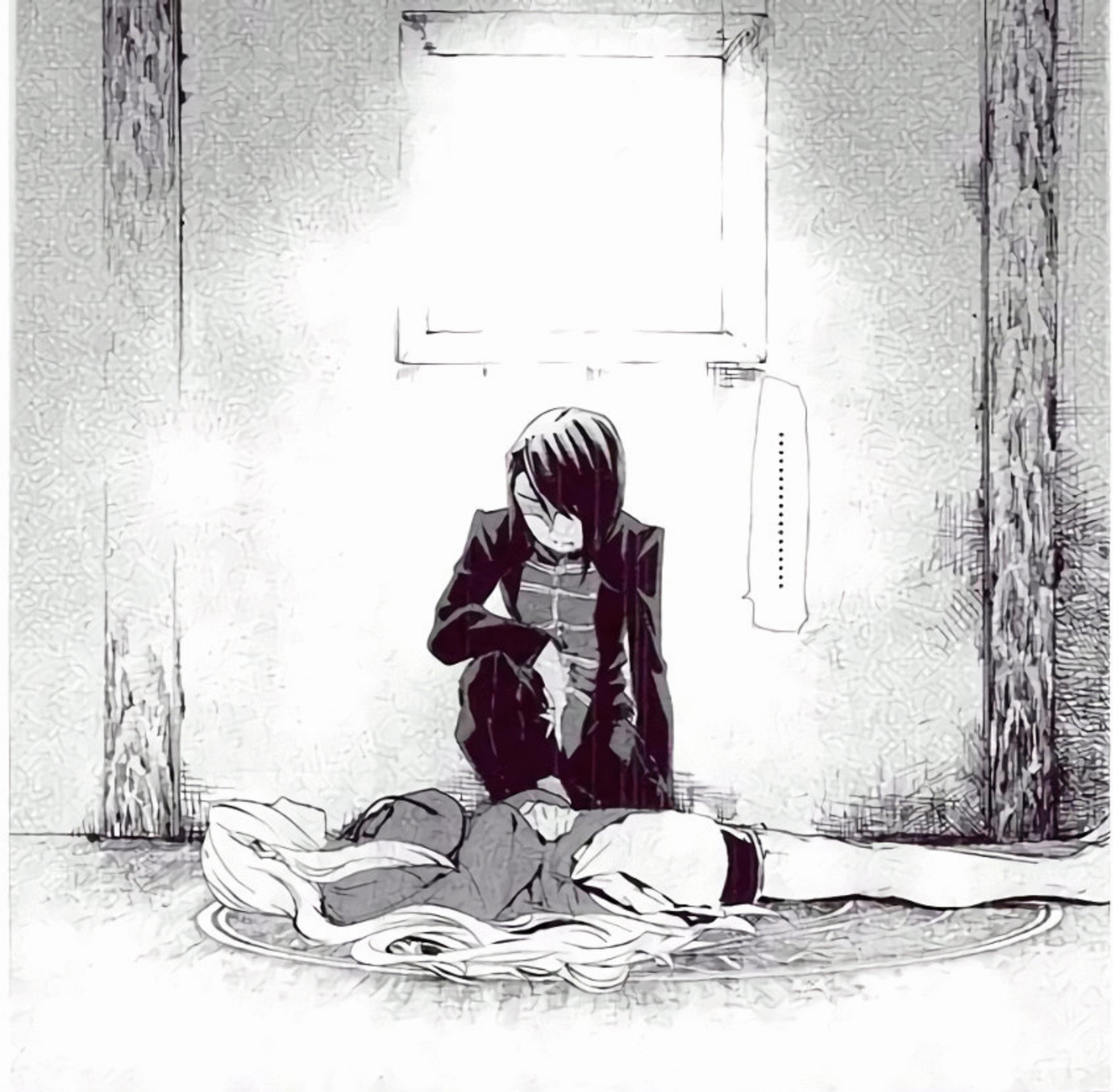
それに伴って私の中身も  
また本来の「器」としての  
機能を取り戻すために  
余計な外装をどんどん  
圧迫しはじめているわけ

これから先私は  
さらにヒトガタの  
機能を破棄して  
もとの「モノ」に  
還っていくわ

次はきつと  
動けなくなるだろうし  
その後はきつと——

舞弥さん

こうしてあなたと  
話をすることも  
できなく  
なるでしょう



.....



切嗣はすべて  
承知の上  
なのですね？

今の貴女が  
どういう容態  
なのかも

ええ

だからこそ  
あの人は私に  
セイバーの  
朝を預けたの

「全て遠き理想郷」

……その効果は  
知っている？

老衰の停滞と  
無制限の治癒能力

——そう聞いて  
います

その効果が  
私という「殺」の  
崩壊を押し止めて  
くれているの

本来ならとつくに  
駄目になっている  
はずの私がまだ  
人間の真似事を  
続けていられるのは  
そのせい

……尤も今みたいに  
セイバーとの距離が  
離れてしまうと  
途端にボロが  
出るんだけど……

この場にセイバーが  
居合わせればどんな  
反応を示すことか

想像には難くない

……何故私には  
教えたのですか？

……



久字舞弥

あなたなら  
決して私を  
憐れんだりしない

きっと私を  
認めてくれる


……そう  
思ったから





衛宮切嗣のために  
死んでください

あの人の理想を  
叶えるために

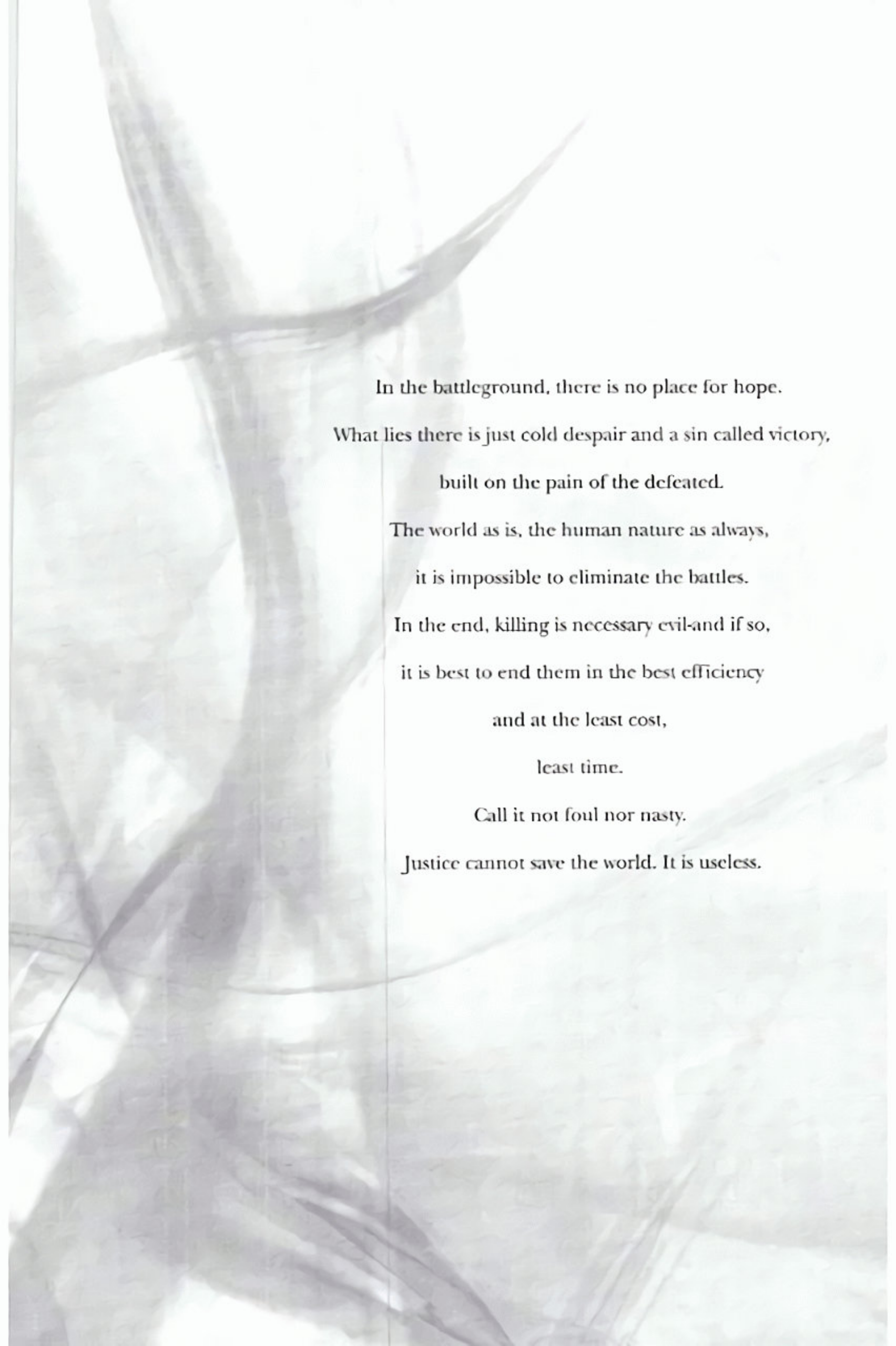


ありがとう……

Fate

7/26/10

7/26/10



In the battleground, there is no place for hope.  
What lies there is just cold despair and a sin called victory,  
built on the pain of the defeated.

The world as is, the human nature as always,  
it is impossible to eliminate the battles.

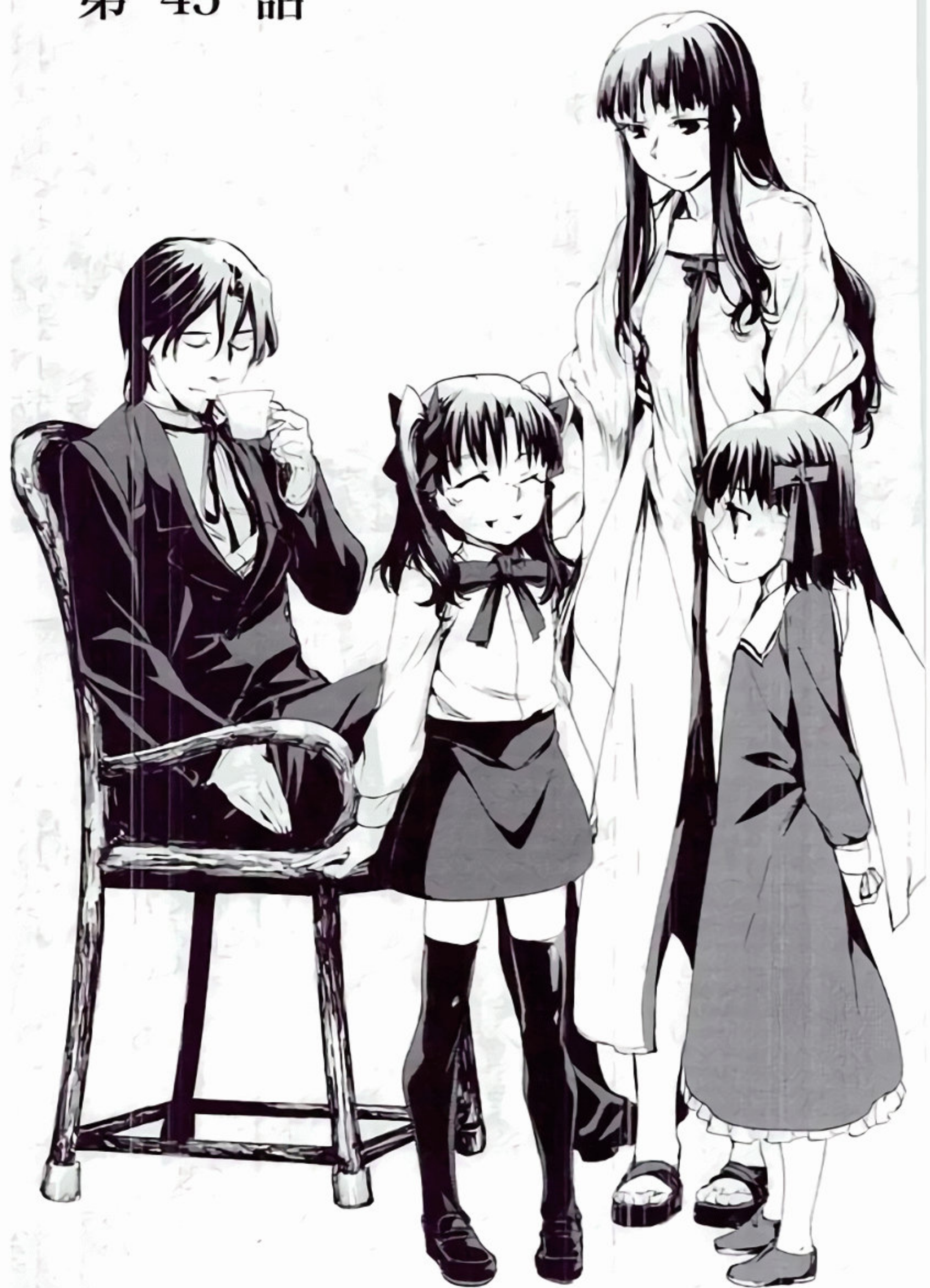
In the end, killing is necessary evil-and if so,  
it is best to end them in the best efficiency  
and at the least cost,

least time.

Call it not foul nor nasty.

Justice cannot save the world. It is useless.

# 第 45 話





—62 : 48 : 35



もし仮に……

これが凛と話を  
最後の機会  
だとしたら？



.....

年端もいかぬ  
この少女に自分は  
何を告げるべきなのか





こんな風に娘の頭を  
撫でてやったことは  
一度もなかったな！



凜……  
成人するまでは  
協会に貸しを  
作っておけ

それ以後の判断は  
おまえに任せる

おまえならば  
独りでもやって  
いけるだろう



私は決して  
天才だった  
わけではない

空を飛ぶこと

は九十九パーセント

魔法の呪い

歴代の遠坂において  
むしろその資質は  
凡庸であつたと  
さえ言える

私はただ遠坂の  
家訓に忠実で  
あり続けた  
だけのことだ

「どんな時でも  
余裕を持って  
優雅たれ」


一〇の結果を  
求められれば  
二〇の修練を積んで  
それに臨んだ

その徹底した  
自律と克己の  
意志だけが  
私の強みであつた  
と言えるだろう

父も私が魔導を  
志す上でとれだけ  
険しい道を歩む  
ことになるか  
予見していたはず


だからこそ先代は  
私に魔術刻印を  
譲渡する前夜  
改めて問うたのだ

「家督を嗣ぐか否か?」と



未来の頭首となるべき  
嫡子としての教育を  
与えてきたのだから  
それは形だけの間い  
だったのだろう

それでも——  
そこに「間い」という  
体裁があった以上は  
曲がりなりにも私には  
選択の余地があった  
ということだ



今にして思えば  
それは私にとって  
先代である父からの  
最大の贈り物  
だったといえる

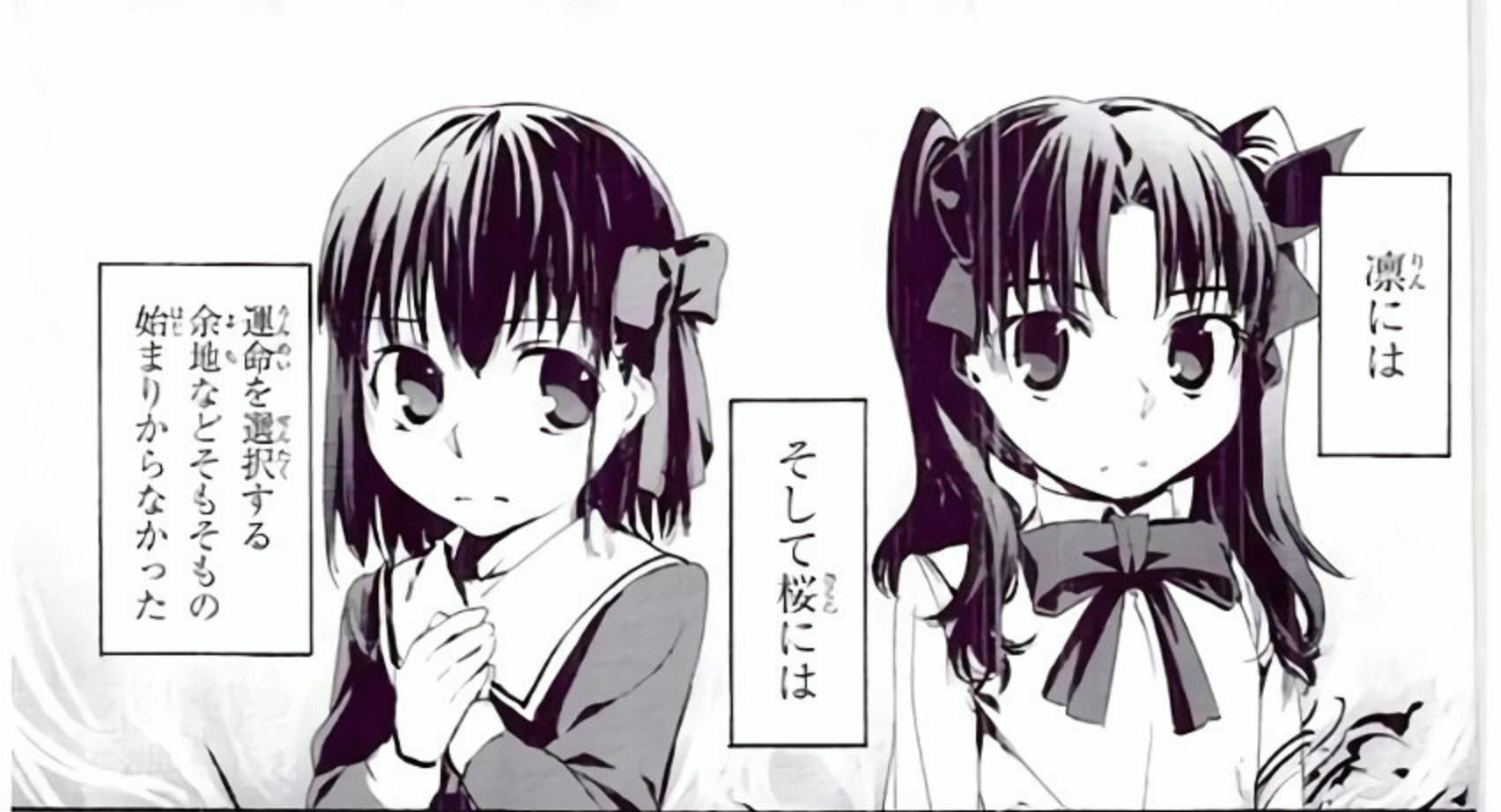
遠坂時臣は  
自らの意思によって  
魔導の道を選んだのだ

その自覚こそが  
私に鋼の意志を  
与えてくれた

そんな風に  
かつて父から  
贈られたのと  
同じ宝を

自分の娘たちにも  
また与えることが  
出来たなら——


だが  
それは叶わない



凛には

そして桜には


運命を選択する  
余地などそもそも  
始まりからなかった



かたや全元素  
五重複合属性

かたや架空元素  
虚数属性


二人が二人とも  
奇跡に等しい  
希有の資質を持って  
生まれてしまった



それは魔性を  
招き寄せる  
呪いでもある


そんな運命に  
対処しうる手段は  
自ら意図して  
糸理の外を  
歩むこと――

すなわち魔導の  
道に進むことだけ




だが遠坂の加護を  
与えてやれるのは  
一人のみ


後継者になり  
そこなった一方にも  
その血に誘われて  
現れた怪異の数々は  
容赦なく災厄を  
もたらすだろうし




このジレンマが  
どれほど私を  
苛んできたか  
知れない



そんな一般人を  
魔術協会が見つければ  
連中は媚々として  
彼女を保護の名の  
下にホルマリン漬けの  
標本にすることだろう



娘はともに一流の  
魔導を継承し  
自らの人生を  
切り拓いていける  
手段を得た



だからこそ  
間桐から来た養子の  
希望はまさに天恵に  
等しかった



だが果たして  
本当にそうなのか？

その時点で私は  
父としての重責から  
解放されたはずだった

後を継ぎ

もしも

瀧の才能は  
私より遥かに  
容易に魔導の秘奥を  
修めるだろう

これより始まる  
瀧の試練に何の導きも  
与えられぬまま  
この娘の前を去る羽目に  
なるのだとしたら――

だが自ら選び取った  
道を進むのに比べれば  
決定された道を  
辿るのはどれほどの  
辛苦があることか

それでも私は  
父親として十全  
だったと言えるのか？





この子には  
詫びる言葉も

行く末を案じる  
必要もない

誇り高き速坂の  
嫡子にかけるべき  
言葉はあと一つしか  
ありはしない

——ああそうか



凛<sup>りん</sup>

いずれ聖杯は  
現れる

アレを手に入れるのは  
遠坂の義務であり  
何より――

魔術師であろうと  
するのなら避けては  
通れない道だ



嗚呼――

かつて私自身が  
頭首の座を  
受け継いだ時でさえ  
これほどの誉れを  
感じたことはない





□□



それでは行くが  
後の事は  
解っているな

はい  
行つてらっしゃい  
ませ お父様



迷いとは  
余裕なき心から  
生まれる影だ

それは  
優雅さとは  
程遠い

凛の眼差しが  
あらためてそう  
教えてくれた



我が子に対して  
詫びなければならぬ  
自分があるとする  
ならばそれは――

敗北した自分

ついに聖杯への  
悲願を果たせぬまま  
終わった自分だ

凍を前として  
恥じることもなき  
父であるうと  
するならば――

遠坂時臣は  
完全無欠の魔術師で  
なければならぬ

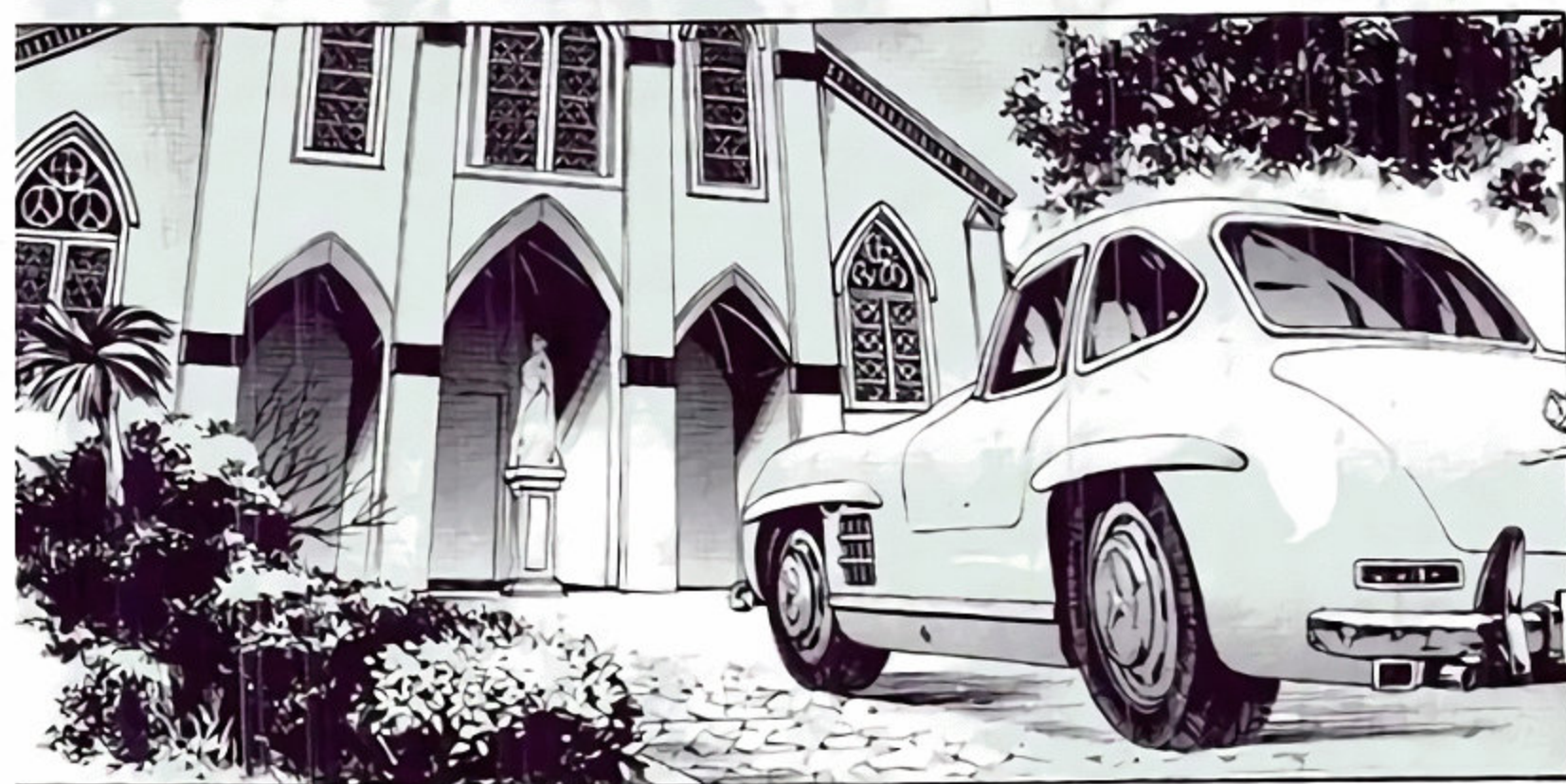
なればこそ――  
この手で遠坂の  
魔導を完遂させる



愛する娘を

教え導くに相応しい

真に十全たる父となる



—54 : 06 : 21





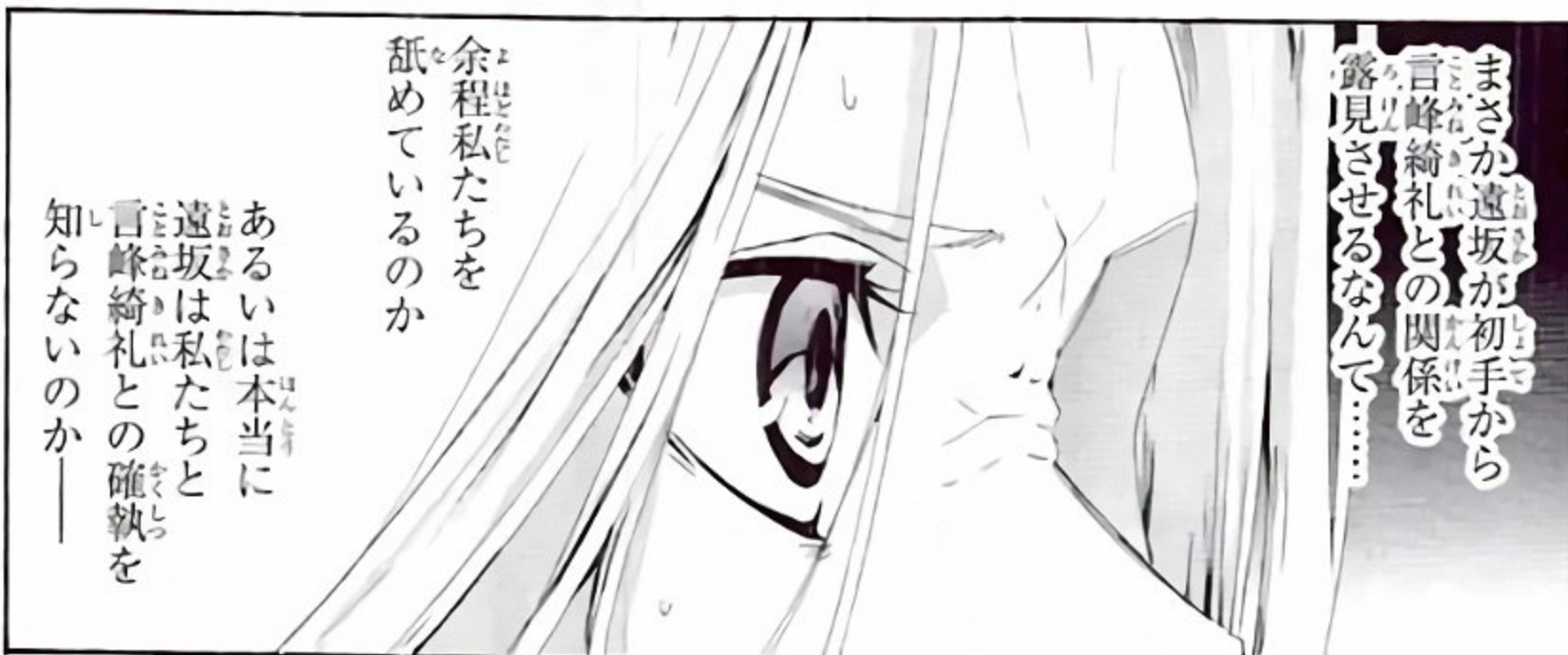
彼はサーヴァントを  
失い既にマスター権も  
手放して久しい



言峰綺礼

私の直弟子であり  
一時は互いに聖杯を  
狙って競い合った  
相手でもあった

——が  
今となっては  
過ぎた話だ



まさか遠坂が初手から  
言峰綺礼との関係を  
露見させるなんて……

余程私たちを  
舐めているのか

あるいは本当に  
遠坂は私たちと  
言峰綺礼との確執を  
知らないのか——



不肖、この遠坂時臣の招待に応じていただき、まずは感謝の言葉もない

此度の聖杯戦争もいよいよ大詰め局面となってきた

残っているのは案の定

「始まりの御三家」のマスターたちと飛び入りの外様が一人

さてアインツベルンの各々方はこの戦局をどうお考えか？

別段 何とも

我らは最強の  
セイバーを統べるが  
故に姑息に機を窺う  
必要もなく

ただ当たり前に  
勝ち進むまでのこと

フン 成る程

それならば  
当方の見解のみ  
忌憚なく述べさせて  
いただくとしよう

我ら相互の  
戦力分析は  
まあひとまず  
棚に上げるとして

ここは  
バーサーカーと  
ライダーについて

我々としては  
当然ながら最終的には  
「御三家」のみで  
聖杯の帰趨を決したい  
ところだが――

残念ながら  
今回の間桐は  
戦路を誤った

脆弱なマスターに  
負荷のかかる  
サーヴァントを  
押しつけ  
みすみす自滅を  
早めている有様だ

おそらく  
勝ち上がって  
くるのは  
ライダーだろう

かの英霊イस्कンダルの  
強さについては  
各々方もご存じかと思う

一〇〇〇年をかけて  
悲願した聖杯に  
どこの馬の骨とも  
知れぬ新参者が手を  
伸ばすというのは――

アインツベルンに  
とっては殊更  
業腹な流れかと  
思うが如何か？

こと新参という  
点においては  
トオサカもマキリも  
似たようなもの  
でしょうに

既にアインツベルンが  
願うのは第三魔法の  
成就そのものに尽きるはず

ならば今なお「根源」を  
目指すこの遠坂時臣に  
聖杯を託せば  
それでもう十分に  
本意に沿うはずだが？

トオサカは  
物乞いの  
真似事までして  
我らから聖杯を  
奪いたいと？



フツ……

聞き手の品性を  
疑いたくなる  
解釈だがまあ  
措いておこう

そのような  
外様の手に聖杯が  
渡ることは  
万に一つも許せない

問題は聖杯についての  
正しき知識を  
持ち合わせぬ者が  
最終戦にまで勝ち残り  
つつある現状だ

そのところは  
お互いに合意  
できるはずだ

要するにトオサカの  
懸念とするところは  
ライダーの脅威のみ  
というわけね

もとより我ら  
アインツベルンは  
他家と馴れ合う  
つもりなどなく

同盟など  
笑止千万

ただし敵の対処に  
序列をつけてほしい  
というなら  
そちらの誠意次第では  
一考してもいいでしょう



……つまり？

遠坂を敵対者として見なすのは他のマスターを倒した後

——そういう約定なら応じる用意もあります

条件付きの休戦協定——か

落とし所としては妥当だな


そんな情報を要求する以上は本気で自らのライターの打倒する覚悟でいるのだから

目論見通りの展開だ

こちらの要求は二つ


まず第一にライターとそのマスターについてそちらが揃っている情報をすべて開示すること

綺礼  
お伝えしなさい




現在は深山町  
中越二丁目の  
マッケンジーという  
老夫婦の家に  
寄生している

聖杯戦争とはまったく  
無縁な一般家庭だが  
ウェイバーの暗示に  
よって彼を実の孫だと  
思い込まされている



ライダーのマスターは  
ケイネスの門下にあった  
見習い魔術師で名前は  
ウェイバー・ベルベット



やはりこの男……  
アサシンを使つて  
諜報活動を——！

もう一つの条件  
というの？

第二の要求は――

言峰綺礼を  
聖杯戦争から  
排除すること



なにも  
殺せとまでは  
言わないわ

それでも  
この戦いが  
終わるまでの間  
この冬木から

いえ  
日本から退去  
してもらいます

さっそく  
明朝にでも

……理由を説明して  
もらえるかね？

やはりトオサカは  
この男の行動について  
関知していないのね

その代行者は  
我々アインツベルンと  
少なからず  
遺恨があります

トオサカの陣営が  
彼を擁するのであれば  
我々は金輪際  
そちらを信用  
することはできない

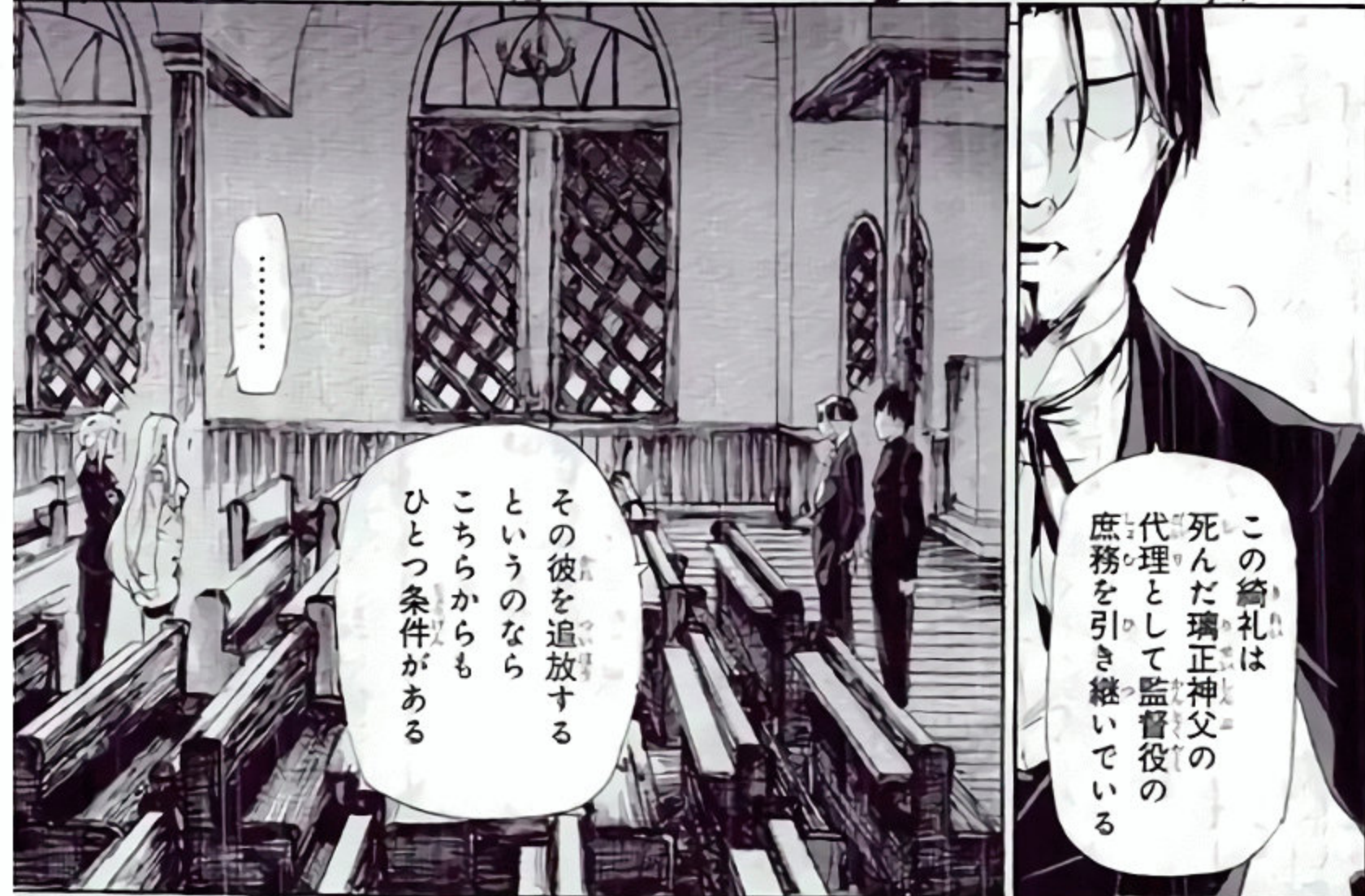
むしろ最優先の  
排除対象と見なし  
ライダーたちと  
協力して攻撃に  
転じます



………どうい  
事かね？ 綺礼




………



その彼を追放する  
というのなら  
こちらからも  
ひとつ条件がある


この綺礼は  
死んだ璃正神父の  
代理として監督役の  
庶務を引き継いでいる



昨夜の戦いで  
見せてもらった  
そちらのセイバーの  
宝具だが――

あまりにも威力が  
壊滅的すぎる

今後はその使用に  
制限を課したい

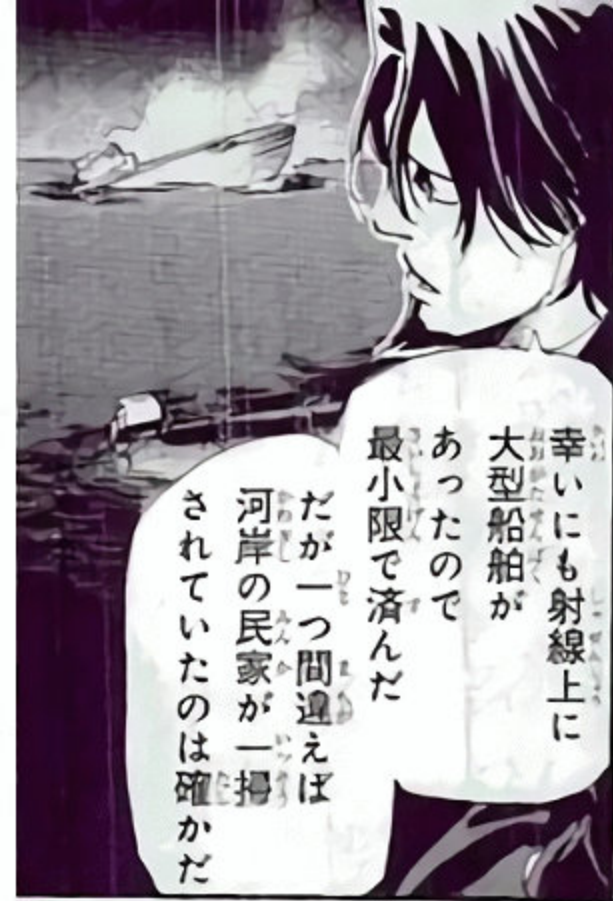


当家は冬木の  
地を預かる  
管理者でもある

今後 聖堂教会の  
隠蔽工作を抜きにして  
聖杯戦争を進める  
となれば過剰な騒乱を  
戒めるのは当然だ

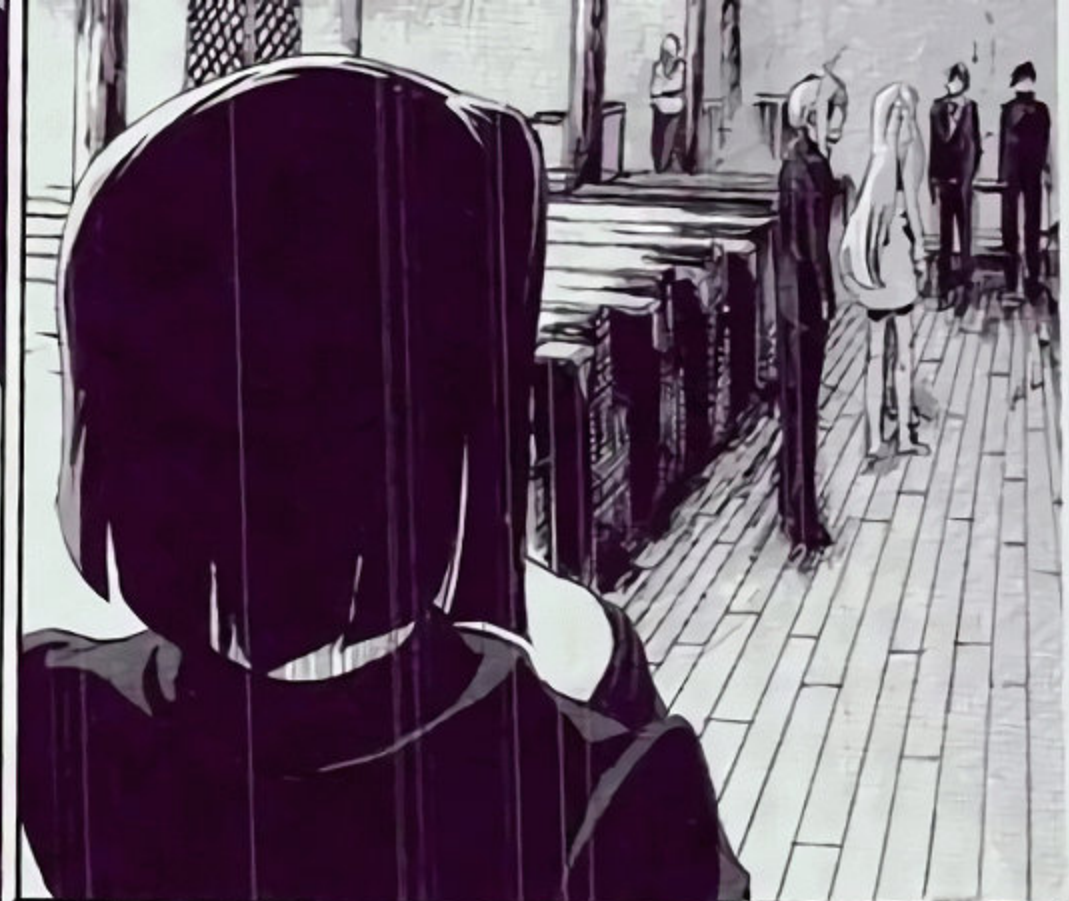
何故遠坂が我々の  
戦略に口を挿む？

昨夜のセイバーの  
宝具が近隣施設に  
被害を与えましたか？



幸いにも射線上に  
大型船舶が  
あったので  
最小限で済んだ

だが一つ間違えれば  
河岸の民家が一掃  
されていたのは確かだ



その船を  
配置したのは  
我々です



余談ながら  
破壊された  
船の持ち主にも  
保険が下りたことを  
確認しています


戒められる  
までもなく我々は  
セイバーの破壊力に  
充分な配慮を  
払っているのです



たしかに好都合な  
位置に船があった  
おかげで心置きなく  
「約束された勝利の剣」  
を使用できたが――

まさかそこに  
衛宮切門の配慮が  
あったとは……






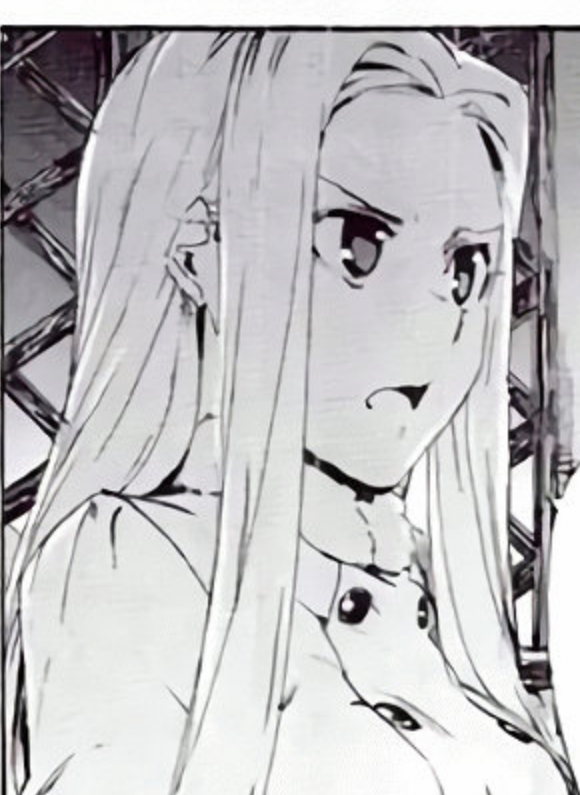
その配慮を  
明文化してほしいと  
要求しているのだ

冬木市内において  
地表での宝具使用は  
無条件で禁止

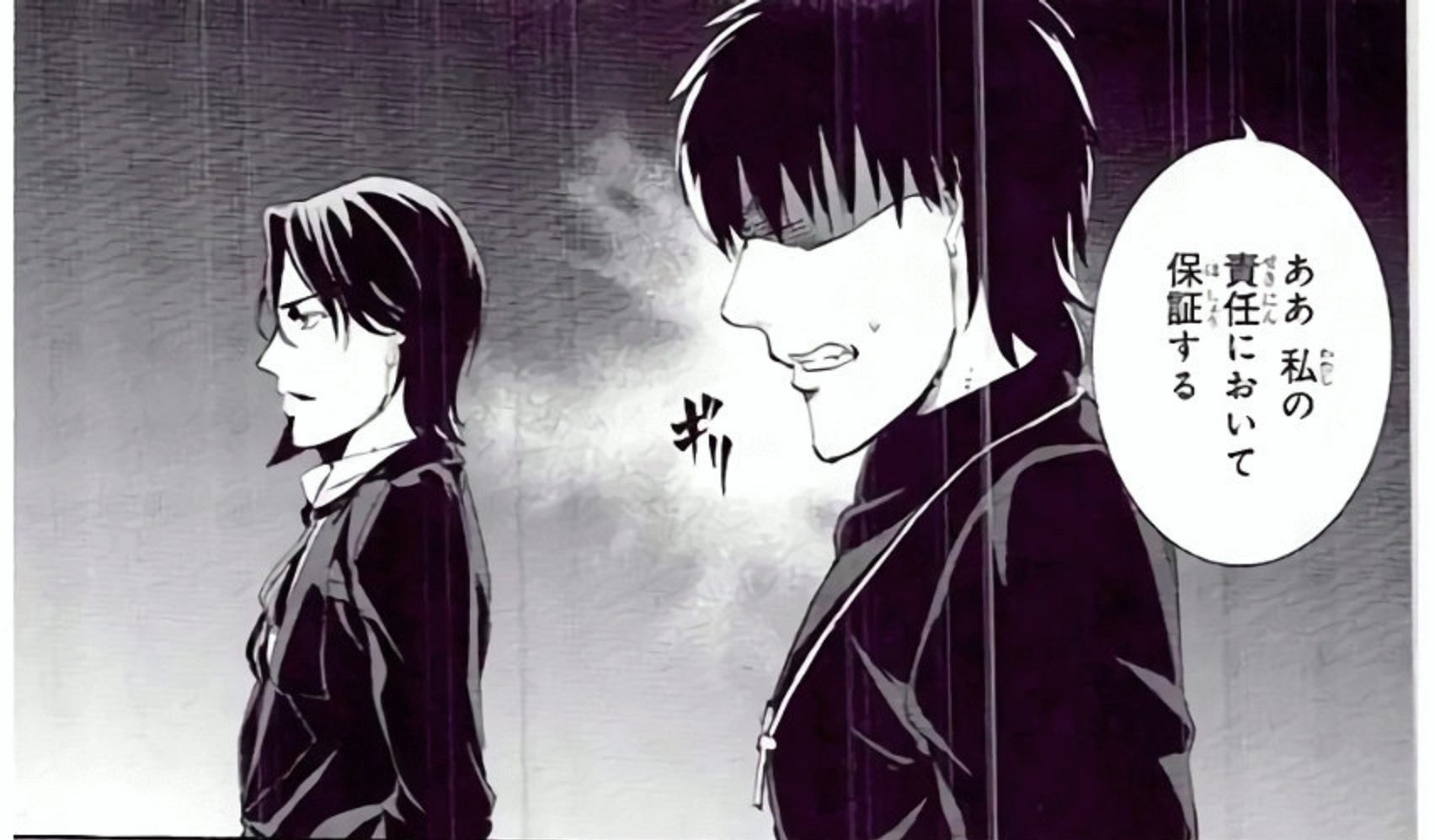
また空中においても  
間接的に民家に  
被害を出す形であれば  
同様とする



この条件を  
承諾できるか？  
アインツベルンの  
マスターよ



……呑めば  
間違いなく  
言峰綺礼を退去  
させるのですね？




ああ私の  
責任において  
保証する

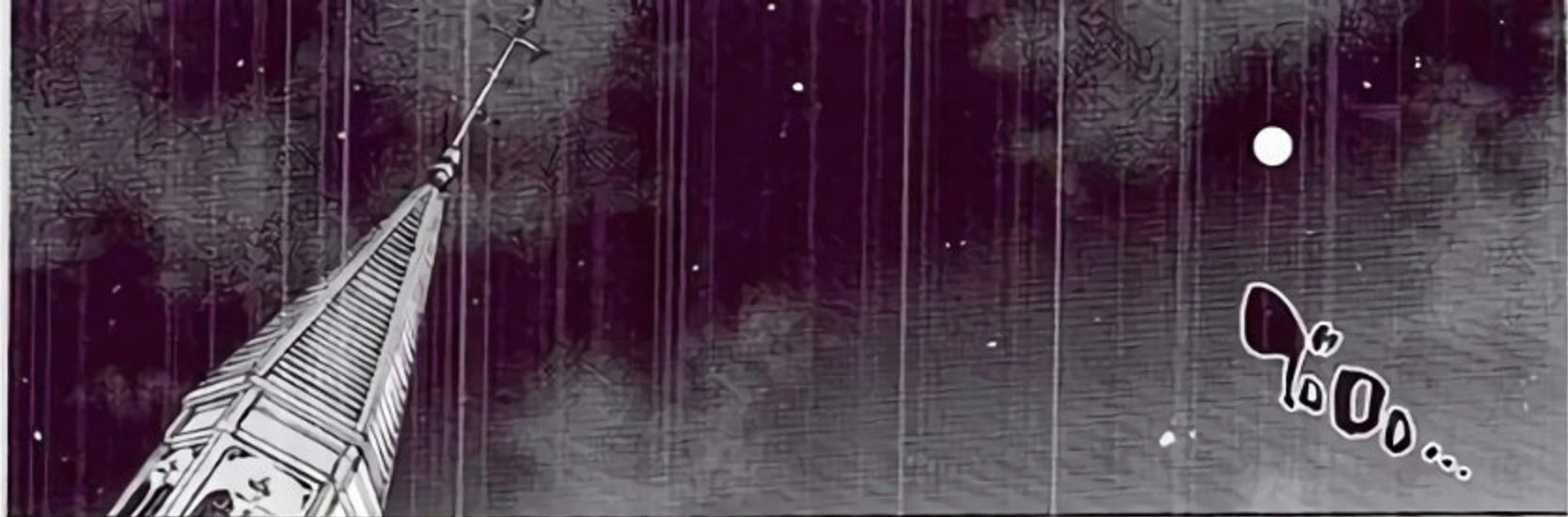
お



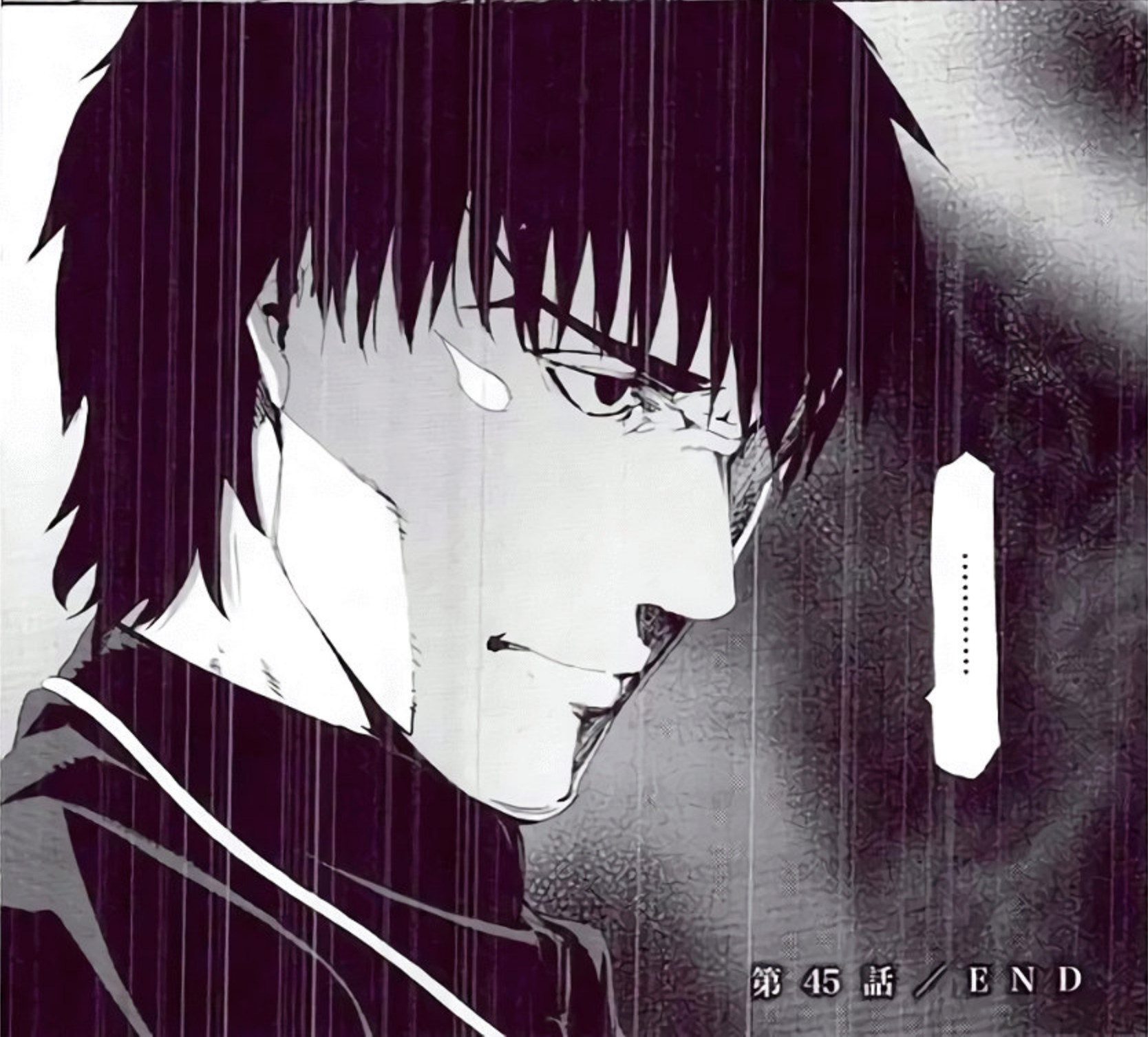
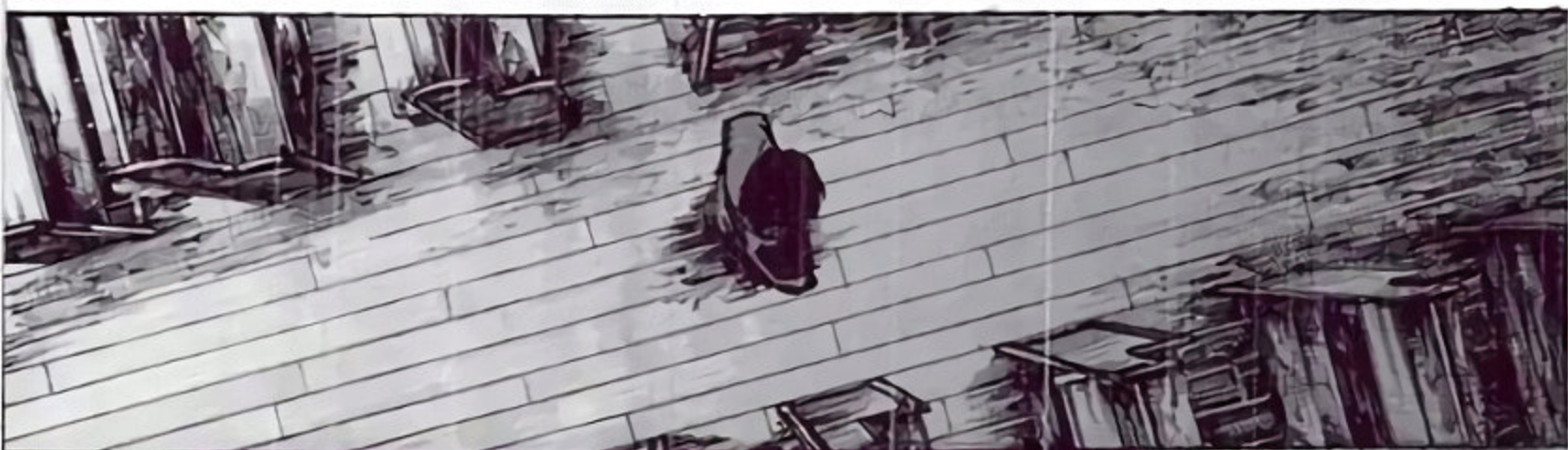
結構です



それでは条件の  
履行を確認した  
上で我々は休戦に  
同意します




うう...



.....

Fate   
フレイム



In the battleground, there is no place for hope.  
What lies there is just cold despair and a sin called victory,  
built on the pain of the defeated.

The world as is, the human nature as always,  
it is impossible to eliminate the battles.

In the end, killing is necessary evil-and if so,  
it is best to end them in the best efficiency  
and at the least cost,

least time.

Call it not foul nor nasty.

Justice cannot save the world. It is useless.



第 46 話



時臣師に見限られた  
ことについて  
今さら文句を言える  
筋合いではない

結局私は  
その腕に再び刻まれた  
令呪のことも

密かに父から  
受け継いだ  
保管令呪の存在も

セイバーの  
真のマスターである  
衛宮切嗣が今なお  
姿を潜めていることも  
時臣師に伝えて  
いないはまだ……

私は何を  
望むのか——？

事後処理に当たると  
王作員たちの報告の  
中に気になった  
ものが三件あった

警察の手に渡る前に  
聖堂教会が確保した

ひとつは海魔が現れた  
付近の河岸にて  
公衆の面前で変死を  
遂げた二人の成人男性

身元は不明のままだが  
右手には令呪の痕跡があり  
キヤスターのマスターと  
断定しては間違いない

死因はおそらく  
大口徑ライフル弾二発

もうひとつは  
新都郊外の  
廃工場で見られた  
ランサーのマスターと  
その許嫁の射殺死体

現場にうち捨てられていた  
署名済みの自己強制証文は  
下手人がいかに悪辣な策謀で  
ケイネス・エルメロイを  
抹殺したかを物語っている





衛宮切嗣——あの冷酷非情なる狩猟機械が  
一人、また一人と獲物を仕留めていく足跡……

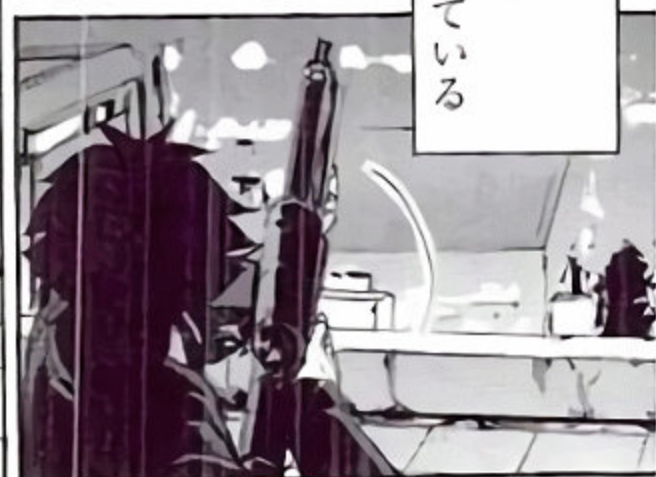


その理由を  
見定めることなく  
私はここを  
去ろうとしている

かつて虚無なる戦いに  
身を投じ続けた男が  
九年の沈黙を破って  
再起した



おそらくは今も  
この夜のどこかで  
あの男は戦い続けている



無限の願望機を  
手にしたとき  
あの男は何を  
祈願する？

その解答は  
果たして私の  
空洞をも埋めるに  
足るものなのか？



.....  
貴様は何者だ？



この期に及んで  
まだ思案か？



それにしても  
律儀なヤツだ

己を見限った  
主君の身をまだ  
案じるとはな

あれは  
当然の判断だ


そもそも私は  
時臣師の道具としての  
役割を終えている  
既にこの冬木に  
留まる理由などない

本気でそう  
思っているわけ  
ではあるまい？

今なお聖杯は  
お前を招いている

そして  
お前自身もまた  
なお戦い続ける  
ことを望んでいる

.....




……物心ついて以来  
私はただ一つの  
探索に生きてきた

なのに今 私は  
かつてないほどに  
答えを間近に  
感じている

ただひたすらに  
時を費やし  
痛みを耐え……

その全てが  
徒勞に終わった



きっと私が  
問い質してきたモノは  
この冬木での戦いの  
果てに——ある

予感がある

そこまで自省して  
おきながら  
いったい何を  
まだ迷う？

全ての答えを  
知った時  
この私は破滅する  
ことになるのだと

いつこのまま  
師の差配に従い  
何も問うことなく  
無為に生涯を  
過ごせば――

くだらぬ事を  
考えるなよ  
綺礼



そんなにも都合良く  
生き方を変えられるなら  
今日のように悩むお前が  
出来上がるわけがない

……

常に問いながら  
生きてきたお前は  
最後まで  
問いかけながら  
死んでいくのだ

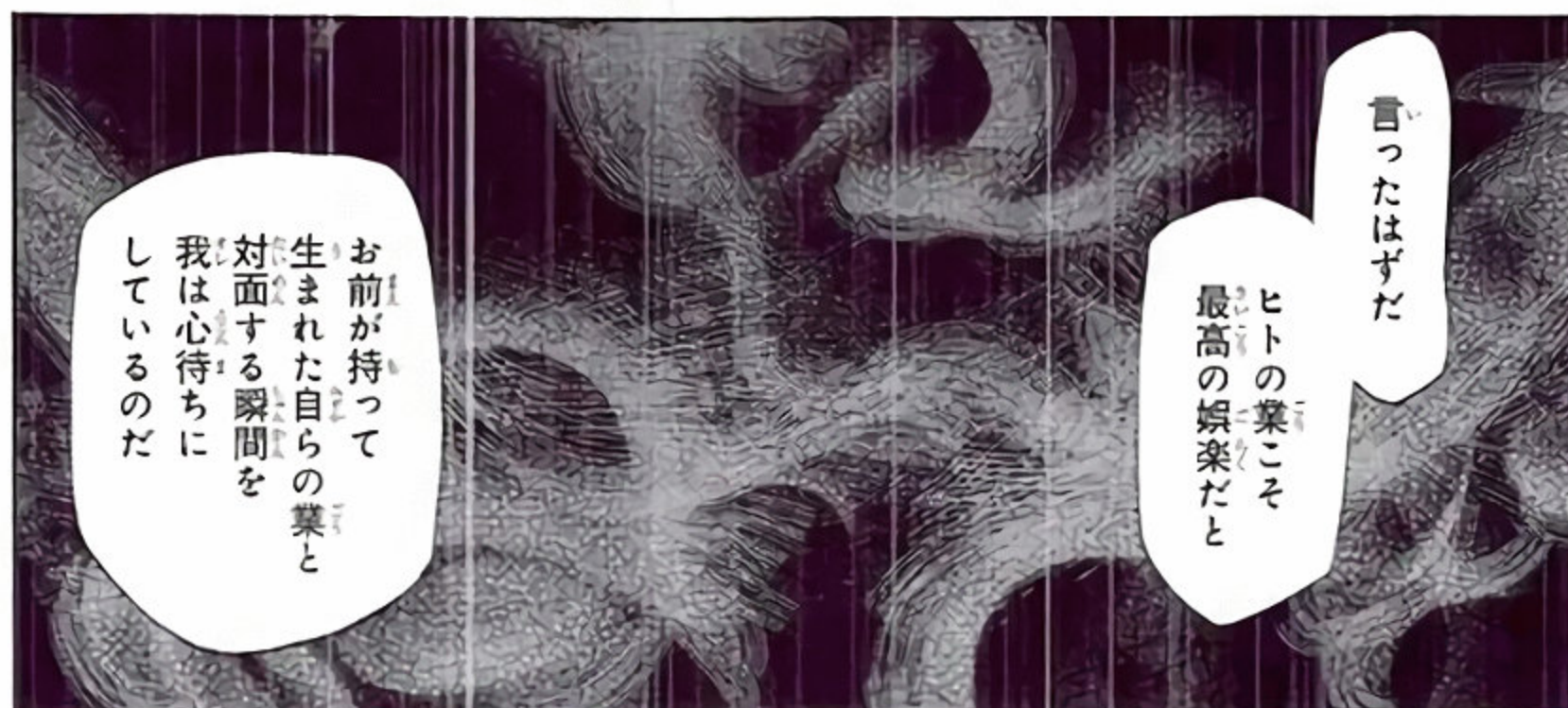
答えを  
得ぬままでは  
安息もないぞ



むしろ  
祝うべき  
であろう？

永きに亘る  
お前の巡礼が  
ついに目的地に  
至るのだ

……おまえは  
祝福するのか？  
アーチャー



言ったはずだ

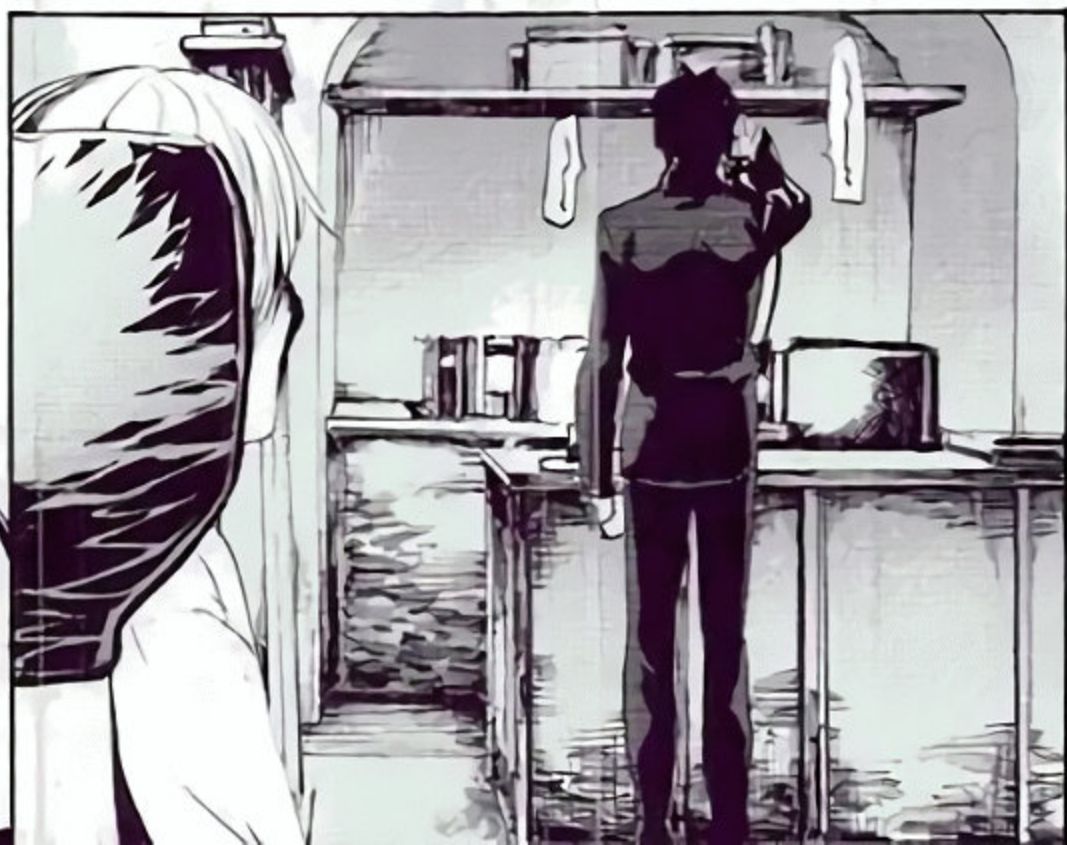
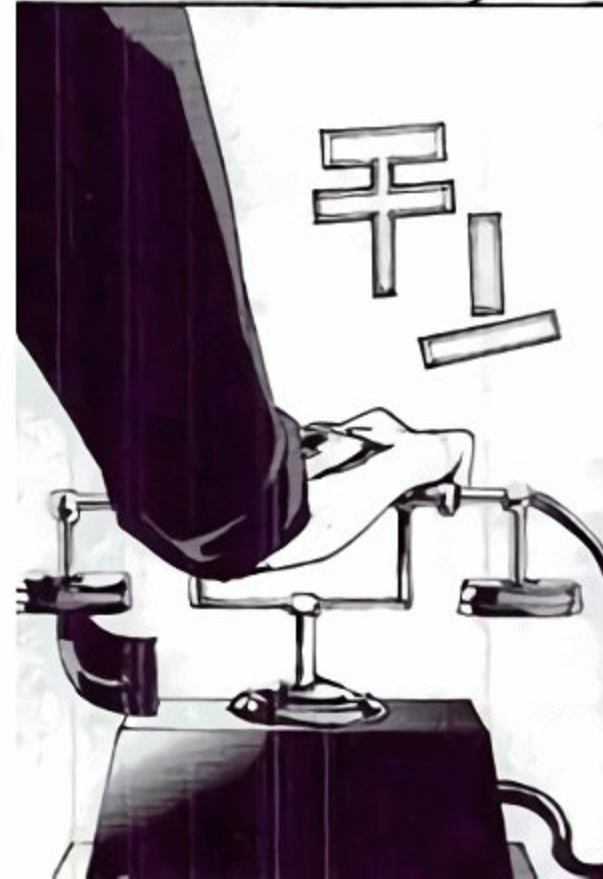
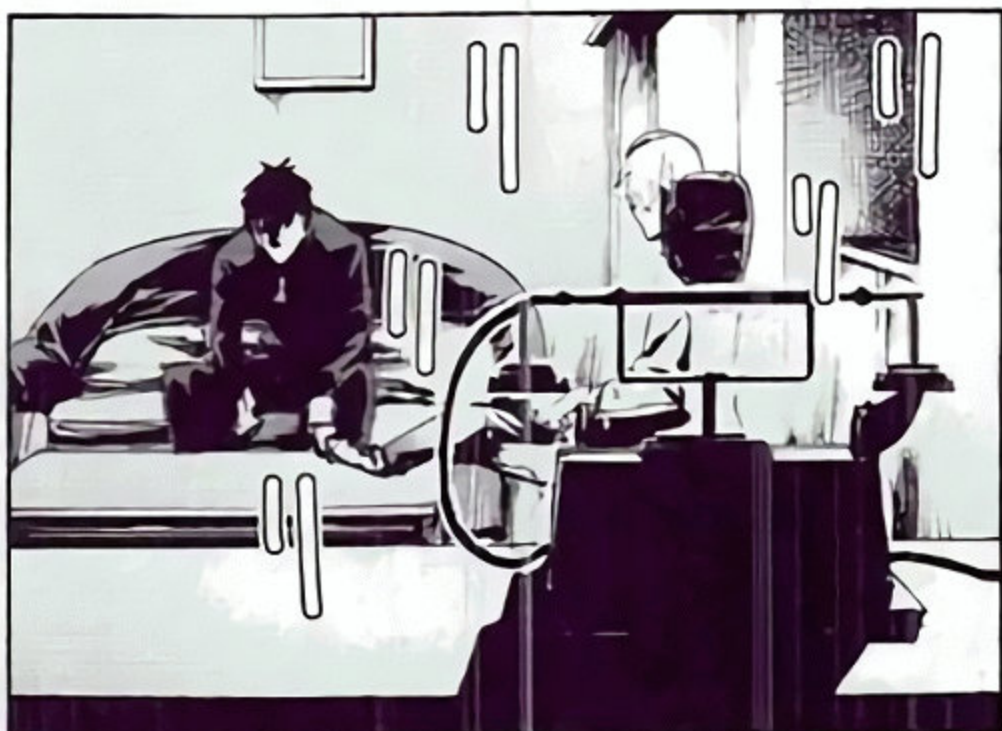
ヒトの業こそ  
最高の娯楽だと

お前が持つて  
生まれた自らの業と  
対面する瞬間を  
我は心待ちに  
しているのだ

フン

そうやって愉悅を  
貪ることのみに  
執心して生きる  
というのはさぞ痛快  
なのだろうな……

羨むぐらいなら  
お前もまたそう  
生きてみればいい  
愉悅の何たるかを  
理解できれば  
破滅など畏れる  
までもなくなるぞ







何かよほど心が  
浮き立つような  
報せでも  
受けたのか？



何だ？  
今のは

父の配下だった  
聖堂教会の工作員  
からの連絡だ

今では全ての連絡は  
私に宛てて寄越される

そうかもな



たしかに  
決め手にも  
なりうる情報  
ではあった：



……フツ

先の会見の後で  
アインツベルンの  
連中を尾行させた

生前の父の指示  
だと言ったら  
疑いもせずに  
果たしてくれた

おかげでいま連中が  
隠れ潜んでいる  
拠点の調べがついた



ハッ

ハッハハ

なんだ綺礼!!

お前という  
ヤツは——ッ!

もとより  
続ける覚悟  
なのではないか!

だが結局の  
ところ……

英雄王

おまえの言うとおり  
私という人間は  
ただ問い続けることの  
他に処方知らない

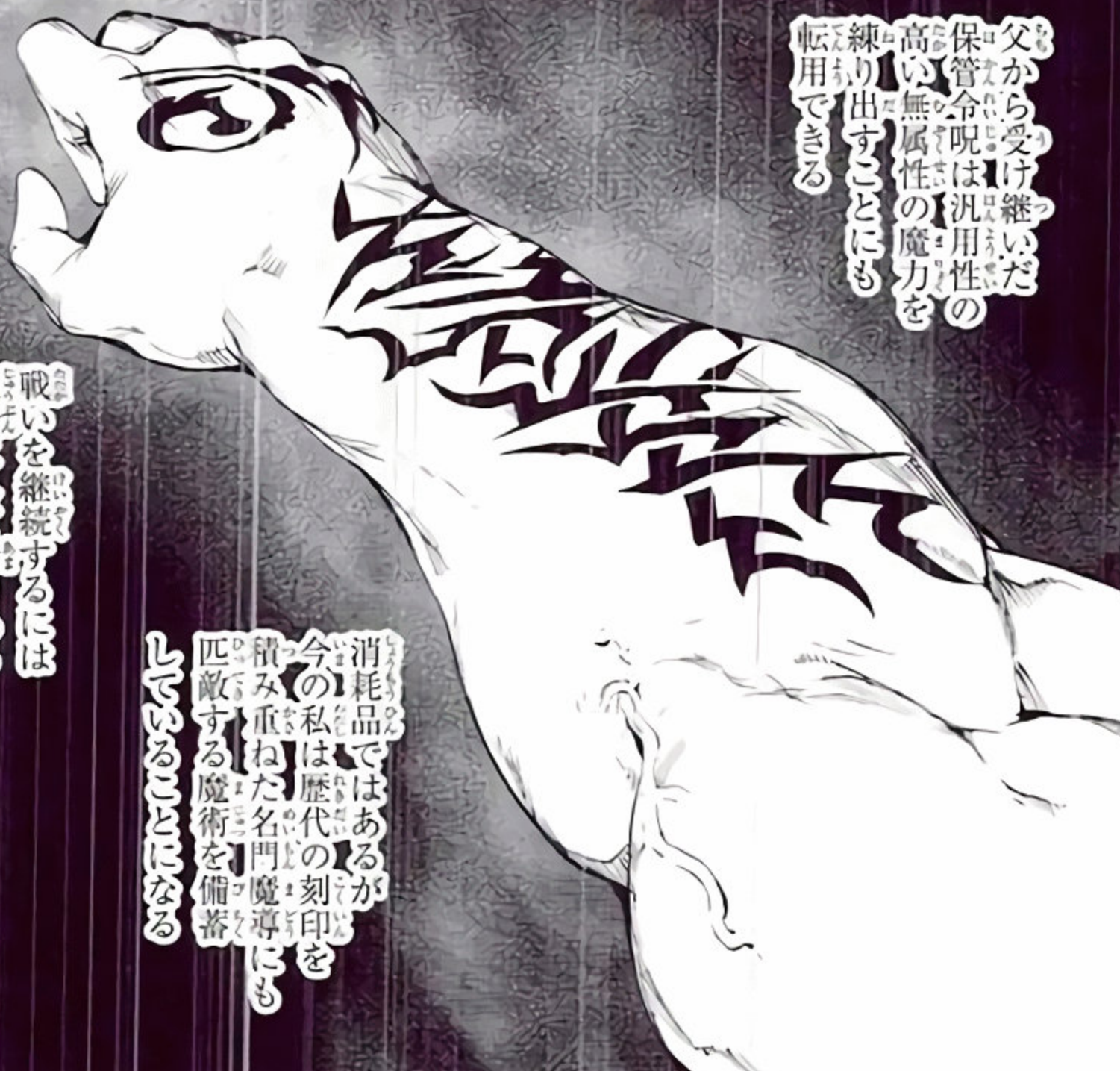
迷いはしたさ

止める手も  
あった

父から受け継いだ  
保管令呪は汎用性の  
高い無属性の魔力を  
練り出すことにも  
転用できる

戦いを継続するには  
充分にして余りある

消耗品ではあるが  
今の私は歴代の刻印を  
積み重ねた名門魔導にも  
匹敵する魔術を備蓄  
していることになる




お前が自らの意思で  
聖杯戦争に  
参ずるならば  
いよいよ遠坂時臣は  
敵であろうが

つまり今お前は  
何の備えもないままに  
敵対するサーヴァントと  
同室しているのだ



しかしな綺礼

さっそくだが  
由々しい  
問題があるぞ




これは大層な  
窮地ではないか？




そうでもない

命乞いの算段  
ぐらいは  
ついている



時臣師と  
敵対するならば  
もうこれ以上  
彼の虚言を庇う  
必要もない



ギルガメツシユ  
まだおまえが知らぬ  
聖杯戦争の真実を  
教えてやろう



……何だと？

この世の内々に  
生じた奇跡が  
世界の外々にまで  
通じるわけがない

願望機の争奪  
などは茶番だ

「始まりの御三家」が  
目論んだ聖杯の真意は  
他にある

そもそもこの  
冬木の儀式はな

七体の英霊の魂を  
束ねて生賢とすることで  
「根源」へと至る穴を  
空けようとする試みだ

奇跡の成就  
という約束も  
英霊を招き寄せる  
ための餌でしかない

その餌に  
まつわる風聞だけが  
一人歩きした結果  
今の聖杯戦争という  
形骸だけが残ったのだ

これは  
遠坂・間桐・  
アインツベルン  
だけの秘密

今回 かつての  
「御三家」の悲願を  
正しく成就しようと  
している唯一の  
魔術師が遠坂時臣だ

時臣師があれほど  
令呪の消費を  
渋っていた  
理由がそれだ

彼は七人の  
サーヴァントをすべて  
殺し尽くすことで  
「大聖杯」を起動させる

七人全てだ  
解るな？

彼は他の  
マスターたちとの  
闘争においては  
二画までの令呪  
しか使えない

最後に残る一画は  
すべての戦いが  
終わった後で  
自らのサーヴァントを  
自決させるために  
必要だったからだ

……時臣が我に  
示した忠義

あれはすべて  
嘘偽りだったと  
言うのか？

彼はたしかに  
「英雄王ギルガメッシュ」  
に対しては掛け値なしの  
敬意を払っていたのだろう


だがサーヴァント  
であるおまえは  
別物だ

いわば  
英雄王の写し身  
彫像や肖像画と  
同列の存在  
でしかない

画廊では一番  
見栄えのする  
場所に飾る  
だろうし

前を通るときは  
恭しく目礼も  
するだろう

そしていざ  
模様替えの際に  
置き場がないとなれば  
丁重に破棄させて  
いただくというわけだ



結局のところ  
時臣師は骨の髄まで  
「魔術師」だった  
というだけのことだ

突き詰めれば  
サーヴァントという  
存在が道具に  
すぎないことを彼は  
冷静に弁えている

英霊は崇拜しても  
その偶像には  
幻想など抱かない



時臣め——

最後にようやく  
見所を示したな

あの退屈な男も  
これでやっと我を  
愉しませることが  
できそうだ





さてどうする  
英雄王？

それでもなお  
おまえは時臣師に  
忠義立てして  
この私の叛意を  
咎めるか？

さあどうした  
ものかな

いかに  
不忠者とはいえ  
時臣は今なお我に  
魔力を貰っている

いかに我でも  
完全にマスターを  
見限ったのでは現界に  
支障をきたすしな……



ああそういうえば  
一人——

令呪を得たものの  
相方がおらず  
契約からはぐれた  
サーヴァントを  
求めているマスターが  
いた筈だったな

そういうえば  
そうだった

だが果たして  
その男

マスターとして  
英雄王の眼鏡に  
適うのかどうか

問題あるまい

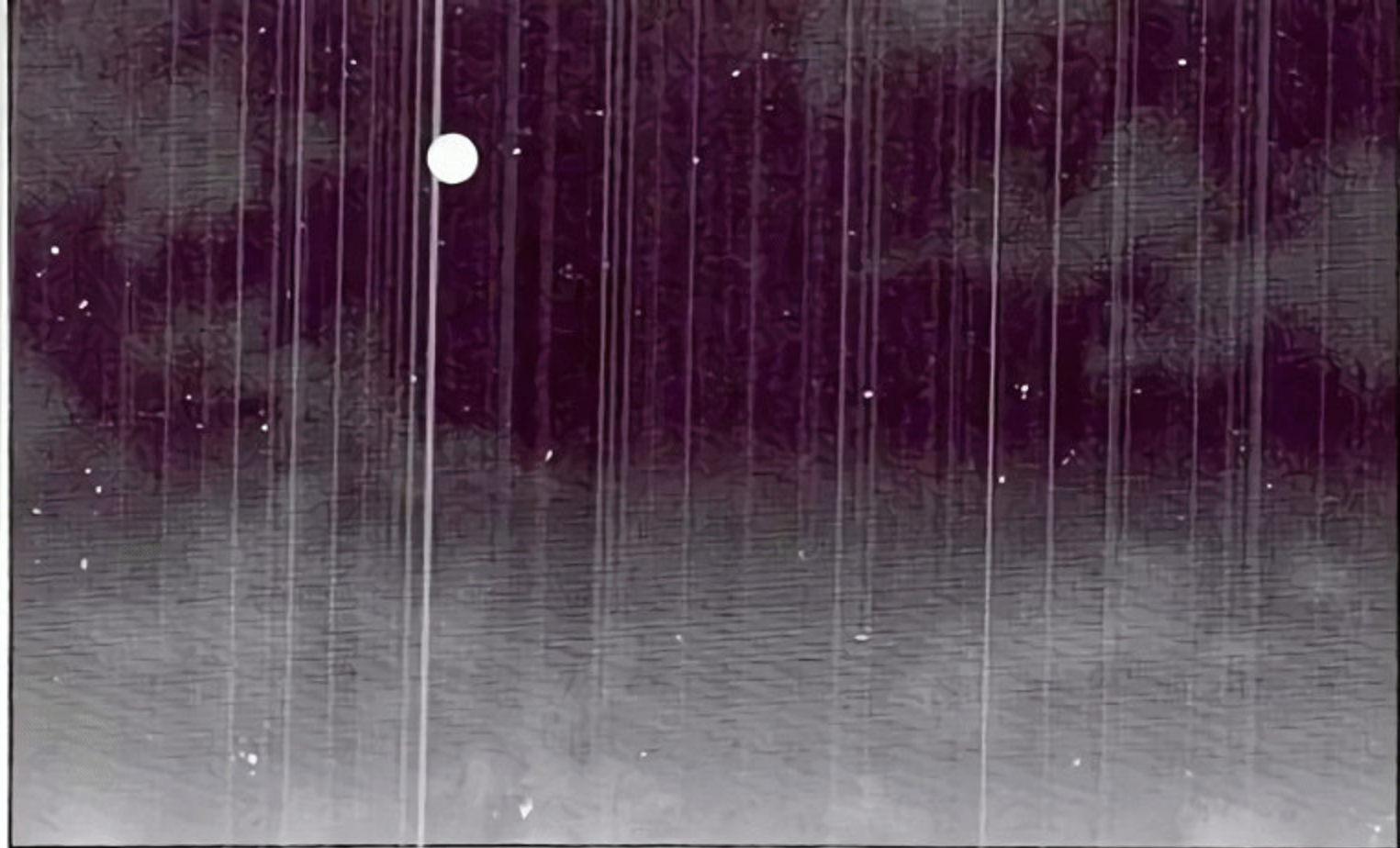
堅物すぎるのが  
玉に瑕だが前途は  
それなりに有望だ

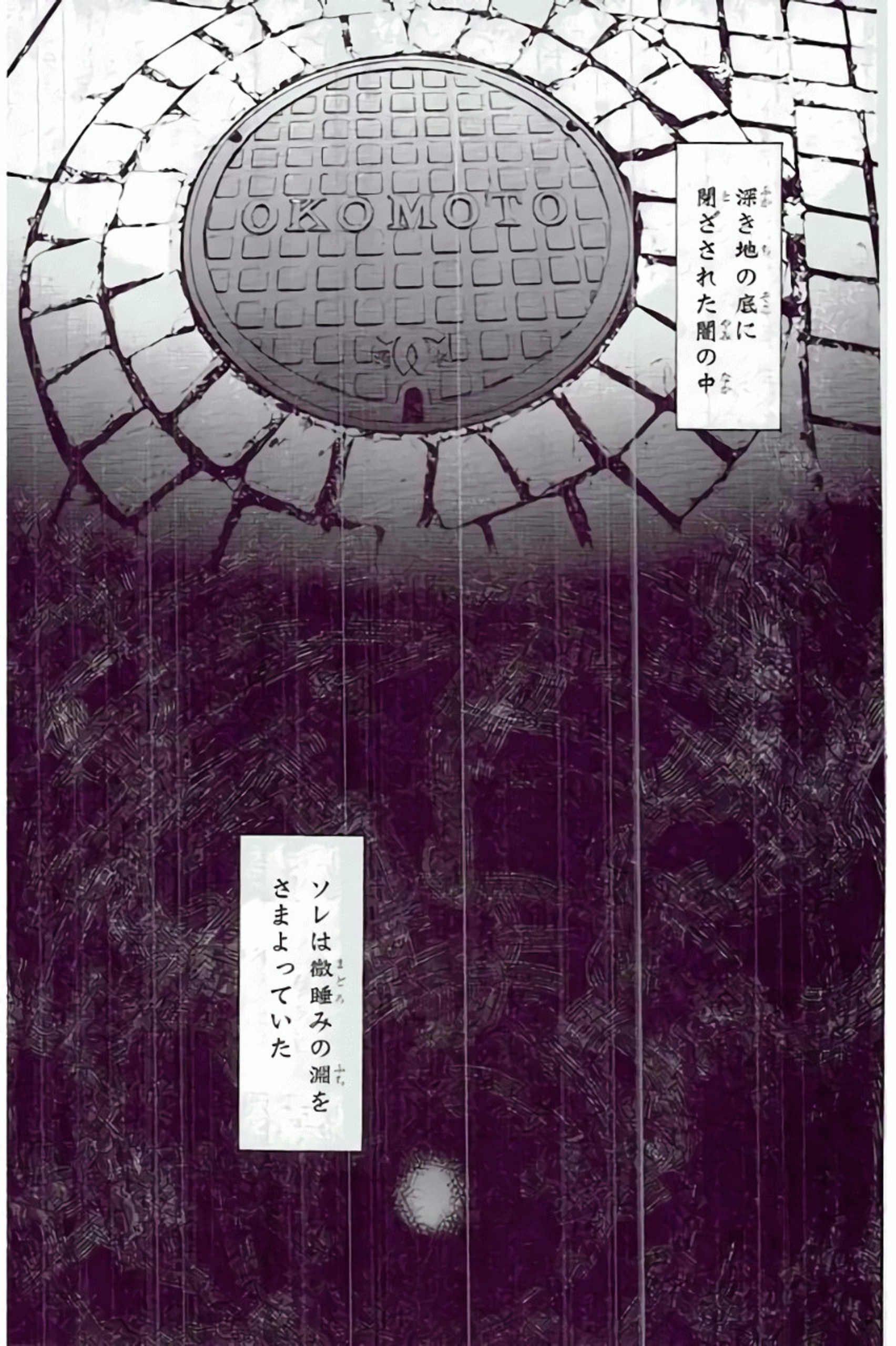
ゆくゆくは存分に  
我を愉しませて  
くれるかもしれん











深き地の底に  
閉ざされた闇の中

ソレは微睡みの淵を  
さまよっていた

浅い眠りの中  
夢に見ていたのは——

かつて遠い日に  
託された  
途方もない  
際限もない  
祈りの数々

良き世界を

替なき魂で  
ありたいと——

良き人生を

そう渴望するあまり  
すべての悪性を余所に  
求めずにはいられなかつた  
いと弱き人々の願い

その「祈り」に  
忘えることで  
かつてソレは  
ひとつの世界を  
救済した

我が身の外に  
咎はなし

我が身の他に  
罪は無し

厭うべきは  
我一人

憎むべきは  
我一人

そう請け負う  
ことで諸人を救い  
彼らに安寧を  
もたらした

故に——ソレは  
救済者にして  
聖者でなく

贖礼もなく

呪われ

時の流れの中で  
いつしかヒトで  
あった頃の名前  
さえ奪われ

蔑まれ……

唾棄され

その「在り方」に  
ついての呼称でのみ  
語り継がれる概念に  
成り果てた



六〇年ほど前

ソレにとつては  
崎き一つほどの  
昔の話

気がつけば  
暗く生温い母胎の  
ような場所にいた

地の底に  
深く息づく  
無窮の間

かつてそこは  
無限の可能性を  
秘めた卵の  
ような場所だった

ソレは胎児のように  
その地に宿り

母の胎盤から滋養を  
授かるが如く  
重脈の地に流れ込む  
魔力を吸り

肥え太りながら  
ただ時を待つ

いつの日か  
この深く熱い闇を抜け  
産まれ落ちるその時を

ふとソレは  
すぐ聞近から  
聞こえた声に  
耳を傾ける

「この世の全ての悪を  
担うことになろうとも  
構わないさ」

「それで世界が  
救えるなら僕は  
喜んで引き受ける」

ああ——呼ばれている

招かれて  
いる  
祝福と  
ともに

応えて  
やれる  
今なら  
ばきつと

既に闇の中で  
膨大に膨れ上がった  
魔力の渦は  
ソレに確たる容を  
与えつつある

かつて遠い日々  
に  
託された数多の  
祈りの数々も  
今ならば具現が  
叶うだろう

祈く在れと  
祈られた姿そのままに

祈くの如く為せと  
望まれた所行の全てを

パズルのピースは  
すべて揃った

噛み合った運命の歯車は  
いま敢然と回りだし  
成就の刻をめぐり  
唸りを上げて加速する

Fate

フェイト/ゼロ

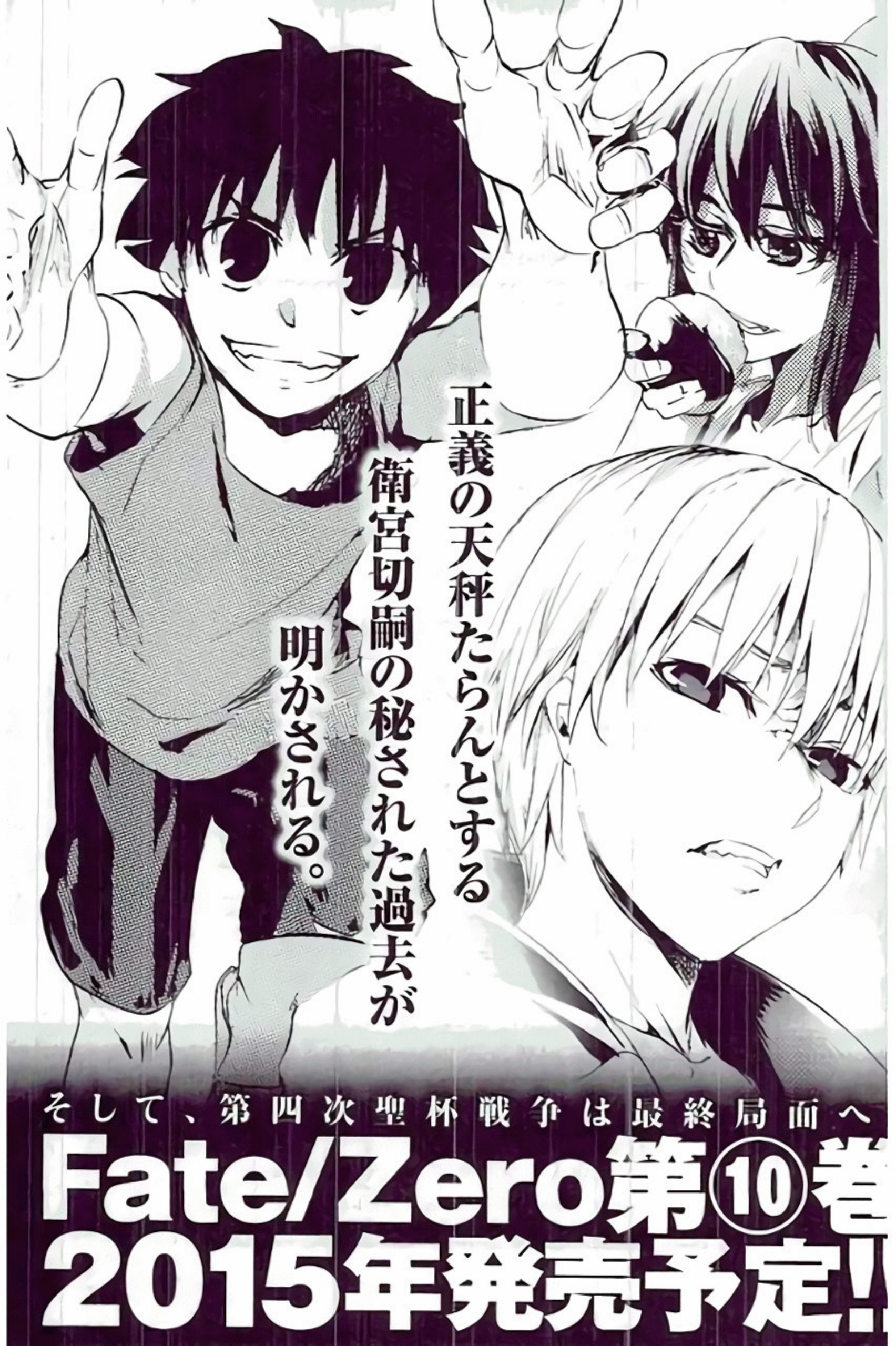
Zero

Staff/

春乃えり、綾野貴弘、夏目りく

**NEXT Fate/Zero**  
—sometime, somewhere—

たとえこの世の全ての悪を担うことになるうとも



正義の天秤たらんとする

衛宮切嗣の秘された過去が

明かされる。

そして、第四次聖杯戦争は最終局面へ

**Fate/Zero** 第**10**巻  
**2015**年発売予定!

## Kadokawa Comics A

角川コミックス・エース

フュイト ゼロ  
**Fate/Zero** ⑨

漫画

真じろう

原作：虚淵玄(ニトロプラス) / TYPE-MOON

2014年12月29日初版発行

発行者

堀内大示

発行所 株式会社KADOKAWA

〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3 電話 / (03) 3238-9521 (営業)  
<http://www.kadokawa.co.jp/>

編集 角川書店

〒102-8078 東京都千代田区富士見1-8-19 電話 / (03) 3238-8541 (編集部)

装幀・デザイン

和田幸男

印刷

大日本印刷株式会社

製本

大日本印刷株式会社

切出 / 「ヤングエース」 14年7月号～11月号

本書の無断複製(コピー、スキャン、デジタル化等)並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。



落丁・乱丁本は、送料小社負担にて、お取り替えいたします。KADOKAWA読者係までご連絡ください。(古書店で購入したものについては、お取り替えできません)

電話049-259-1100(9:00～17:00/土日、祝日、年末年始を除く)

〒354-0041 埼玉県入間郡三芳町藤久保550-1

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体名とは関係がございません。

2014 KADOKAWA CORPORATION, Printed in Japan

©Shinjiro 2014 ©Nitroplus/TYPE-MOON  
ISBN978-4-04-102023-4 C0979







KADOKAWA